

清末小説から

150

2023.7.1

包天笑漢訳「新造人術」——原作と底本……………神田一三 1

もうひとつの漢訳ル・キュー「虚無党奇談」——松居松葉『虚無党奇談』……………沢本香子10

漢訳デラノイ『鉄锚手』の原作……………荒井由美17

呉禱漢訳小説の特色……………樽本照雄24

《2014-2016年东亚近代翻译文学研究综览》之辨正……………付 建舟34

「説部叢書」の箱売り——商務印書館の販売活動……………樽本照雄37

清末小説から17、24、34、50

★樽本『清末小説五談』の公開を予告します。『清末民初小説目録第14b版』はダウンロード罫

清末小説研究会 日本〒520-0801 滋賀県大津市におの浜2-2-5 212号 樽本照雄方

包天笑漢訳「新造人術」

——原作と底本

神田一三

1 はじめに

包天笑漢訳「新造人術」(1910)の原作について新発見があった。三豊が指摘してHenry A. Hering “Mr. Broadbent's Information” (Pearson's Magazine, March 1909) という。念のためカタカナ表記などで補記する。ヘリ

ング (Henry A(ugustus). Hering, 1864-1945)

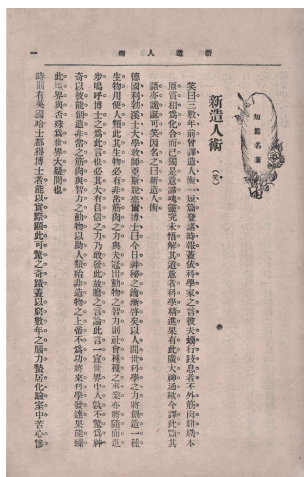
「ブロードベント氏の報告」(『ピアスンズ・マガジン』1909.3)となる。

天笑漢訳にはもともとから原作者も原作名も記していない。漢訳の原作について新しい発見がなされるのはうれしい。探索の困難度が高いからそう感じる。上記のままを清末小説研究会ウェブサイト(2022.2.23)で紹介した。三豊も同日付で自分のウェブサイト「微博」で書いている。そこでは「英国 Pearson's Magazine 1909年3月号」と表記して傍点個所が加えられた(傍点筆者。以下同じ。後述)。

ヘリングは英国の作家。雑誌に多数の作品を投稿しているという説明がある*1。

包天笑は英文原作から直接漢訳しない。主として日本語作品を底本に使用する。英語作品ならば英語のできる張毅漢、楊紫隣らと共訳することはある。

笑「新造人術」(『小説時報』第6期 宣統二年七月朔日(1910.8.5))である。ご覧のと

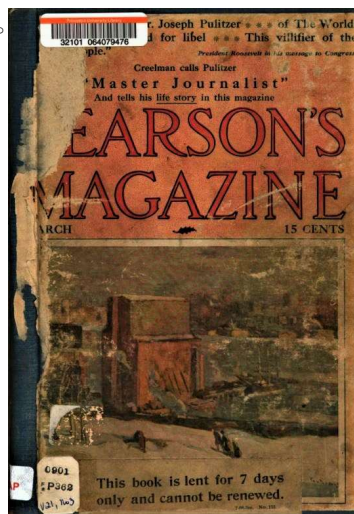


首頁



表紙

筆者がはじめに見たのは米国版（第21巻第3号）だった。ヘリング作品を掲載していないとくり返す。



米国版表紙 作品未掲載

おり原作、日訳を明記しない。

笑はいうまでもなく包天笑を指す。彼の名前しか掲げないから一見すると創作だと勘違いしそうだ。しかし天笑自身が冒頭前言で「翻訳して(今訳此篇)」と書いている。底本は日本語だろうと推測できる。

手順として三豊が示した原作を確認することからはじめる。

2 原作の探索

三豊が指摘する『ピアスンズ・マガジン』1909年3月号を探した。

ネットでは比較的簡単に見つかる。ウェブサイトの google books, hathi trust などが該当号を収録していた。

見ると奇妙なことに気づく。そこにはヘリングの作品が掲載されていないのだ。

調べてわかったのは『ピアスンズ・マガジン』が英国で創刊され、のちに米国版も刊行されたという事実である。すなわち英国版と米国版の2種類がある。しかも両誌は同時に刊行されていた。

1909年3月号は英国版と米国版が並存している。ただし刊年が同一であっても収録作品は別物だ。また巻号数も異なる。

ということで英国版（第27巻第3号）を探した。みつけたのは合訂本である（google books所収）。挿絵はロビンソン W. Heath Robinson によると表示がある。



首頁

三豊が説明文で雑誌名に「英国」をつけた理由がこれでわかる。小説が掲載されたのは英国版であり米国版ではないことを指している。厳密に区別している事実をさりげなく記した。

小説内容はおおよそ次のとおり。

小説家ブロードベントが語り主だ。彼のもとに人造人間 (automaton) が逃れてくる。小説家は並外れた知能と記憶力を持つ人造人間の助けを得て歴史大作の執筆にとりかかる。そこに造人主バクスターが登場する。自作の電気装置を操作し電波を飛ばし肉体的に苦痛を加えた。ついに人造人間を連れ帰ってしまった。

ブロードベントがその一部始終を報告したのがこの作品だ。原題が「ブロードベント氏の報告」である事由でもある。

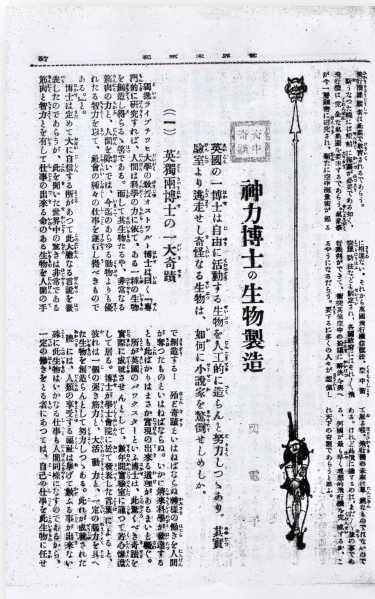
つぎは天笑が使用した日本語底本を探す。

3 底本の探索

ヘリングという名前が判明している。それを手がかりにして會津信吾『日本科学小説年表』(1999) *2を見た。次のように書かれている。

「(奇中奇談) 神力博士の生物製造」H・A・ヘリング原作/閃電子訳(冒険世界4増刊) 40頁

該誌のマイクロフィッシュが国会図書館に所蔵されていた。年表にあるとおり閃電子「(奇中奇談) 神力博士の生物製造」(『冒険世界』第3巻第5号1910.4.20増刊号「世界未来記」)だ。



首頁

さらに横田順爾の著作を見る。そこには閃電子が三津木春影の筆名であることの指摘がある*3。

三津木春影(本名一実、1881-1915)、早稲田大学卒。博文館の雑誌『冒険世界』の編集者兼執筆者となった。翻案「呉田博士」シリーズで有名*4。

春影は英語原作の題名を「神力博士の生物製造」と変更した。「神力博士」とは神業のような力を持った人物、すなわちバクスター卿(Lord Baxter。春影は「バクスターといふ博士」とする。後述)を指す。彼が生物を製造したことを前面に押し出して作品名を書き換えた。たしかに小説の主題は人造人間だ。それに注目すれば春影の改題も納得できる。

メアリ・シェリー Mary Shelley 作の“Frankenstein”(1831)を思い出す読者もいるだろう。()内に春影日訳を挿入して両者の関係を示す。科学者フランケンシュタイン(バクスター=神力博士)が作った怪物(生物)と同じになる。ハリウッド映画の影響からか怪物そのものをフランケンシュタインだと誤解する人がいるという。フランケンシュタインは造人主の方である。

また原作の一人称語りではなく第三者が状況説明する形に変更する。原作は章分けしていない。春影はそれを9の部分に分けて章題をつけた。「(一) 英国両博士の一大奇蹟」というぐあいである。

4 ヘリング原作と春影日訳、さらに天笑漢訳

前言

原作は題名の下にある大学教授の発言を引用して前言抜いだ。英語→日訳(ルビ省略。以下同じ)→漢訳の順に示す。

【原文】“By specialising it may be possible for science to create a type of animal capable of doing the heavy work of the

world-creatures of vast physical strength, coupled with a higher form of intelligence than has been evolved as yet in any animal excepting man.—Professor Ostwald, Leipzig University p.266

「専門化することによって、科学は世界の重労働をこなすことのできるある種の動物、すなわち強大な体力を持ち、人間を除くあらゆる動物よりも高い知能を持つ動物を作り出すことができるかもしれない」ライプツィヒ大学オストワルト教授

ドイツのある大学教授がそう予言した。科学的に専門化すれば人間とほぼ同等の動物を人工的に作り出すことができるかもしれない。人造人間が仕事を代わってやってくれることを言う。この小説の主題をまとめた。その言葉通りの人造人間が出現するという予告になっている。

春影は次のように翻訳する。

【春影】独逸ライプツィヒ大学の教授オストワルト博士は曰く『専門的に研究すれば、人間は科学の力に依て、ある一種の生物を創造し得らるゝ筈である。而して其生物たるや、非情なる筋肉の力と、人間を除いて[て]は、今迄のあらゆる動物よりも優れたる智力を以て、社会の種々の仕事を遂行し得べきものである。』と。57頁

この部分は直訳していると言っていい。本文を以上のように始める。ただしその前に春影(あるいは編集者)は小説全体を凝縮する紹介文をつけている。次のとおり。「英国の一博士は自由に活動する生物を人工的に造らんと努力しつゝあり。其実験室より逃走せし奇怪なる生物は、如何に小説家を驚倒せしめしか。」

「逃走せし奇怪なる生物」とはバクスター卿が製造した人造人間(あるいは人工生命体)のことを言っている。人間がそれを作るのは神の

領域を犯すことを意味する。欧米ではわざわざ説明しなくても分かっているという前提だ。しかし日本ではその理解はない。ゆえに春影は原文を手短にまとめたうえで原作にはない説明を書き加えた(下線筆者)。

【春影】博士は定めて大に自信する所があつて此大胆なる言説を発表したのであらうが、此を聞いた世界中の驚きは非常である[。]筋肉と智力とを有して仕事の出来る命のある生物を人間の手で創造する！殆ど奇蹟といはねばならぬ神様の働きを人間が奪つたものといはねばならぬ。いかに将来科学が発達すると此ばかりはまさか実現の出来る道理があるまいと騒ぐ。57頁

下線部分は春影による加筆である。では天笑はどのように漢訳したか。

天笑もまた翻訳を始める前に序言をつける。彼は清末の読者には特別に説明する必要があると考えたようだ。

【天笑】笑曰。三数年前。曾訳造人術一短篇。登諸時報。蓋依科学家之言。彼其蟻行跂息者。不外筋肉組織。本原質相為化合而已。独是意識魂靈。究未悟解其道。意者科学精進。果有此広大神通歟。今訳此篇。其語亦詭誕可笑。因名之曰新造人術。1頁

はじめに。数年前「造人術」という短篇を翻訳して『時報』に掲載したことがある。科学者のいうところによればそのうごめく動物は筋肉組織はもとより合成したものにはかならない。ただし意識魂霊だけはそれを理解する方法はないのだった。その意味するところは科学が進んでもはたしてこの広大な神通力があるかということだ。今この小説を翻訳したがそのいうところはためて笑うべきものだ。それで「新造人術」と名付けた。

ルイズ・ストロング原作、抱一庵訳「造人術」
—天笑と魯迅

ストロング原作「造人術」について少し説明する。

『時報』に掲載した翻訳は、笑「(短篇小説)造人術」(『時報』1906.5.20)である。

天笑が使用した底本は日本語訳だ。ルイズ・ストロング、原抱一庵主人訳「造人術」(『小説泰西奇文』知新館1903.9.10。奥付は著者：原余三郎)という部分訳である。その原作は Louise J(ackson). Strong “An Unscientific Story” (“The Cosmopolitan” 1903:2)という。「ルイズ・ストロング」は抱一庵の訳だ。今なら「ルイズ・ストロング」だろう。抱一庵の日訳が「造人術」だから天笑はそれをそのまま漢訳に使用しただけ。

該作品が有名であるのは魯迅が同じ日本語訳にもとづいて独自に漢訳しているからにほかならない。魯迅が関係しなかったならば研究者はそれほど注目しなかったと思う。

米国路易斯託崙著、訳者索子(魯迅)「(短篇小説)造人術」(『女子世界』2年4・5期(16・17期合刊)刊年不記)だ。魯迅も漢訳名に同じく「造人術」を採用した。『女子世界』は刊年不記だが陳大康によれば([編年③1027])「周樹人、第2年第4・5期合刊(原16・17期)光緒三十二年五月二十四日(1906.7.15)」という(賈立元260頁注②も同様)。なにか根拠があるのだろう。一方、謝[仁敏13]は第2年第4・5期 刊年不記(実際1906.7上旬)と推測する。

天笑漢訳が先行し魯迅漢訳は少し遅れたらしい。1年違いだからほぼ同時期といいいい。別々に抱一庵日訳を漢訳した。それを見れば抱一庵の著作は清末の人々に人気があったらしい。

ストロング作品は人工生命の創造を主題とする。ただし作られた人造人間の形状は当時のアメリカにおいて存在した中国人差別と黒人差別

という歴史的事実を反映している。すなわち人工生命は中国人と黒人を合成して邪悪な姿と意識をもつものとして描かれる。英文原作を読んでも気づかなければ理解することはむづかしい。

製造された多数のそれが集団で最後には造人主を襲撃するという物語だ。だからこそ原文は「非科学的物語」と題された。しかし抱一庵は作品の最後までを日訳していない。原作を調べてこそ判明することだ。

ここが重要なところである。抱一庵は最初の部分のみ、つまり人造人間が生成される個所だけを日訳して中断してしまった。人造人間が中国人差別と黒人差別によって成立したところを翻訳していない。

包天笑と魯迅は抱一庵日訳しか読んでいないのだから全体を知る由もない。しかたがなかった。

しかし研究者のばあいは違うだろう。過去において多くの研究者はストロング作品を探索せず魯迅が科学の素晴らしさに感動して漢訳したと的外れな評論をして平気なのだった。魯迅の翻訳は絶賛する。林紓の翻訳は嘲罵する。中国学界に従来から存在した標準的な評価のひとつである⁵⁾。

ストロング「造人術」の日訳は人造人間が製造される過程部分のみを切り取った作品だ。一方のヘリング「新造人術」はすでに完成された人造人間が登場するという違いがある。その形状も両者ではまったく異なる。

翻訳の方向

はなしを「新造人術」にもどす。

春影の日本語翻訳は英文原作どおりというわけではない。前後を入れ替えたり、いくつかの箇所です省略し簡略化している。特に最後部分を無視して切り上げている(後述)。

主人公が別荘にいたとき犯罪者が侵入してきたことがあった。警察が犯罪者を捕まえた。その際に主人公の小説家はけがをしてその後1カ

月も右腕を吊らなければならなかった。小説執筆のためにタイプライターを打つには不便だ。

春影はこの部分は大筋に関係がないと考えたか削除した。だから天笑漢訳にもない。

また最初の個所では記述の順序を入れ替えをしたのは日本の読者が理解しやすいように工夫をしたとも考えられる。直訳ではない。多少の削除と書き換えを行なっているのは事実だ。翻訳近くまでいっているといってもいい。微妙な日本語訳に違いない。ただし基本構造についていえば英文原作から大きくは乖離していない。筆者はそう判断する。一方、天笑の漢訳は少しの省略を施しながら春影日訳をほぼ忠実になぞっている。

人造人間は半人半羊

人造人間といってもいくつもの形態がある。科学者フランケンシュタインが作った怪物は人間と同型だった。ストロング「造人術」のばあいは中国人と黒人を合体して卑小化したものだ。多種多様で幅広い。

ヘリングが創造したのは次のような人造人間である。

【原文】 It was about five feet high, and had the body of an animal, with human legs and arms, an animal head with a prodigious cranium, on the sides of which two animal ears stuck grotesquely upward. It was a species of Faun. p.267

身の丈は5フィート(1.5m)ほどで、動物の身体、人間の足と腕、動物のけたはずれた頭蓋骨の頭、その両脇には動物の耳が異様に上に突き出していた。ファウヌス(Faun)の一種である。

「ファウヌス(Faun)の一種」と書いてある。ローマ神話に出てくる牧神。上半身は人間、下半身はヤギの姿をして角がある。のちにはギ

リシャ神話の牧神パンと同一視されたという。普通は半人半羊などといわれる。図を見れば頭と上半身は人間で下半身がヤギだ。頭にはヤギの角と耳がついている。ヘリングの記述するのは「ファウヌスの一種」というから神話の半人半羊と同じではない。ここは注意点だ。

のちにヘリング作品を収録した作品集には写真のような絵図を添えた*6。



▲研究社“NEW ENGLISH-JAPANESE DICTIONARY”1960。631頁

それは人間にヤギの角を生やして恐ろしい表情をした生物だ。下半身は描かれていない。これを選択掲載したのは現代の編集者である。ヘリング作品とは関係がない。原作に添えられた挿絵があるからわかる。そちらはまったく異なってやや可愛げのある半人半羊が描かれている。

左上に立っているのがバクスター卿だ。後ろ姿を見せて耳を手で覆っているのが小説家。人造人間があお向けに倒れている。頭だけが角のないヤギ、手足身体は人間のままだ。上下の洋服(小説家の古着)を着て靴下をつけてスリッパをはいている。片方のスリッパは空中に跳ね上げられた瞬間を描いた。

バクスター卿が人造人間を痛めつけている図だ。彼は自作の電気機械を操作して人造人間に苦痛を与えて脅迫するのだった。その電気機械



から光線らしきものが発射されている。電波を示しているらしい。逃亡した人造人間を家に連れて帰るのが目的だ。まわりに散乱している紙がある。それは人造人間が小説家の代筆をしている原稿だ。タイプライターを高速で打ちながら代筆ができるほど知恵の発達した人造人間というわけ。

春陽日訳と天笑漢訳を見る。

【春陽】手と足とは人間通りだが、胴体は動物、それから頭蓋も素晴らしく大きい動物で、でをかしい事には頭の左右から羊のやうな二本の長い耳がピヨンと生へてゐる。何の事はない、古来林野牧畜を治め給ふと称せられる半人半羊の神様そのまゝだ。58頁

【天笑】奇哉。奇哉。蓋見其手足確似人類。而身体仍為動物。頭蓋骨似較人類為巨。而頭之左右。聳立兩耳。形同羊角。古來林野畜牧之時代。有此半人半羊之神。今殆見之矣。3頁

怪しやな。その手足を見れば確かに人間に似ている。また身体は動物で頭蓋骨も人間よりは少し大きいようだ。しかも頭の左右にはふたつの耳がそびえ立ち、その形は羊の角と同じだ。古来林野牧畜の時代に半

人半羊の神がいたが、今はじめてそれを見た。

原文は「ファウヌスの一種である (It was a species of Faun.)」とある。あくまでも類似の動物だと明記している。それを春陽は「何の事はない、古来林野牧畜を治め給ふと称せられる半人半羊の神様そのまゝだ」とした。「ファウヌス」をそのまま使えば日本の読者は理解しないだろう。ゆえに「古来林野牧畜を……」だと説明を加えて翻訳した。その説明はいい。だが最後の「神様そのまゝだ」と断言しては原文どおりではなくなる。

天笑も春陽をほとんどなぞった。ただし両耳が羊の角と同じ形をしていると漢訳した個所は春陽から離れた。春陽日訳に「角」はない。小さな誤訳である。

春影日訳と天笑漢訳に添えられた絵図も示す。



春影日訳挿絵 → 天笑漢訳挿絵

春陽挿絵は「怪異博士の造つた怪人／機械の如くに活動する怪人出づ」と題する。全体を暗く描いている。発射された電波を目立たせるためかもしれない。絵図の基本構造はヘリング挿絵と同じだ。ただ左右を反転させた。バクスター卿と人造人間、さらに階段の後方に翼を持つ人体らしきものが描かれる。人造人間の頭部は

ヤギのつもりだ。右腕が遮って顔の細部が隠れてしまっている。さらに頭部が背景の黒色と重なった。それによりたてがみのある馬に見える可能性が出てきた。身体に下着だけを穿いて転倒している。バクスターが手に持った機械から電波が発射されているのは同じ。ただし散乱する原稿もなければそこにいる小説家も消去してしまった。天笑挿絵は原画を劣化模写した際に階段と有翼人体を省略した。加えて背景の黒色を部分的に残した。だからヤギというよりもどう見ても馬の頭部だ。天笑漢訳では説明しているからいいようなもの見た目は重要だ。

この絵図2点を並列すれば天笑漢訳が春影日訳を底本に使用していることが明白である。

「バクスター」漢訳の謎

細かいことを指摘する。春影が「バクスターといふ博士」と翻訳した個所だ。原文が“Lord Baxter”であることは述べた。本稿ではバクスターを使用している。ところが天笑漢訳では「哈士都得博士」と表記しているのが不可解だ。

Baxter を漢訳すれば例としてバクスター、バクスター、百特などが考えられる。それらと哈士都得では微妙に異なる。順序を入れ替えて哈都士得ならばまだ理解できる。そうならば誤植の可能性が高い。その理由は春影がバクスターと表記しているからだ。哈ha(バ)都du(ツ)士shi(ス)得de(ター)と対応する。天笑は促音の「ツ」に漢字「都」を振ったということだ。日本語促音の表記にまどわされた。天笑の日本語理解の程度が見えてくる。といったところで当時の読者は日本語訳も英文原作も知らないのだから問題にはならない。

珍しい例ではない。よく知られた呉構にも勘違いがある。英人ブラツクを勃拉錫克と誤訳した。その理由はカタカナの「ツ」を「シ」と誤認し「錫」を当てたのだった。

5 結 末

小説家はかねてからスチュアート時代を舞台にした歴史小説を書こうとしていた。それには大量の資料を準備する必要がある。人造人間は食事もせず24時間働く。しかも頭脳にはいくらでも知識を記憶することができて忘れることがない。タイプライターも打つことができる。小説家は助手として人造人間を使って執筆の準備を進めていった。

そこに出現したのがバクスターだ。電気機械(the Marconi apparantus/春影:マルコニ式の電気機械/天笑:麦爾克尼式之電気機械)を操作して人造人間を痛めつける。個人に固有の震動率に合わせて電流を送れば自由自在に操ることができるという説明だ。上に紹介した挿絵がその場面を描いている。

バクスターは人造人間について小説家が文章にして公表すれば自作の電気機械によって危害を加える(殺す)と脅した。そのまま人造人間を連れて汽車に乗って帰っていった。

春影はここまでを翻訳して物語を打ち切った。最後は「生物が真に創造されるとしたならば、それは果たして人間社会の為め幸か不幸か」(64頁)と字句を創作して締めくくる。天笑はそれを直訳して次のとおり。「嗚呼。創造生物。創造生物。果人間社会之幸乎否乎」(10頁)

読者の中には気づく人もいたのではないか。人造人間が存在することを公表すればバクスターは小説家を殺害すると脅迫したではないか。この物語そのものが小説家自身を殺す理由になる。その矛盾が解決されていない、と。

しかしヘリング原作にはその問題を解決する部分がかかれている。

小説家は仕事を手につかないほど人造人間の行く末を心配する。人造人間がいなければ準備をしている歴史小説を進行させることができないうのだった。

小説家が事実を公表すれば死ぬことになる。

それにひるまず「ブロードベント氏の報告」を書いた。社会にむけてバクスターが研究室でなにを行なっているかを知らせるのが目的だ。人造人間が見つかる可能性も残されている。その結果、自分が死ぬことになれば当局がその原因を突き止めてくれる。それほど人造人間が小説家にとっては必要な存在だということを強調した。小説家の人造人間に対する深い愛情を吐露して物語は終了する。

春影にとっては作中小説家の個人的願望をそのまま翻訳するつもりはなかったようだ。それよりも抽象的に「人間社会の為め幸か不幸か」と締めくくる方が小説としては適切だという判断だったのだろう。

天笑漢訳は加筆はせず少しの省略があるだけでほとんど春影日訳のままだといっている。罫

【注】

- 1) EVERETT F. BLEILER “SCIENCE-FICTION THE EARLY YEARS” THE KENT STATE UNIVERSITY PRESS, 1990 には次のように見える。HERING, HENRY A[UGUSTUS](1864-) British author. Frequent contributor to the major British periodicals. In later years resident on Jersey, Channel Islands. The Western American local of many of his stories is probably on a literary device in imitation of the work of Bret Harte. p.358
- 2) 會津信吾『日本科学小説年表』里艸1999.6.30
- 3) 横田順彌『近代日本奇想小説史』ピラールプレス2011.1.20。611頁
- 4) 末國善己「編者解説」三津木春影著、末國善己編『探偵奇譚 呉田博士【完全版】』作品社2008.7.15。476頁ほか
- 5) 次の論文は関連する一部分だ。
熊融[陳夢熊]「關於《哀塵》、《造人術》的說明」『文学評論』1963年第3期 1963.6.14
戈 宝権「關於魯迅最早的兩篇訳文——《哀塵》、《造人術》」『文学評論』1963年第4期 1963.8.14

陳 夢熊「知堂老人談《哀塵》《造人術》的三封信」『魯迅研究動態』1986年第12期

神田一三「魯迅「造人術」の原作」『清末小説』第22号 1999.12.1 (2001年、許昌福によって漢訳された)

神田一三「魯迅「造人術」の原作・補遺」『清末小説から』第56号 2000.1.1 (2002年、許昌福によって漢訳された)

劉 徳隆「《造人術》及其翻譯者」『清末小説』第23号 2000.12.1

王 爾齡「魯迅編訳《造人術》的一二補証」陳夢熊『《魯迅全集》中的人和事——魯迅佚文佚事考釈』上海社会科学院出版社2004.8

郭 長海「魯迅訳《造人術》和包天笑訳《造人術》」呉曉峰主編『中国近代文学史証——郭長海學術文集』下冊 長春・吉林人民出版社2005.3

中島長文「《哀塵》一篇は魯迅の訳する所に非ざるを論じ兼ねて「造人術」に及ぶ」『颯風』第38号2005.3.28

宋 声泉「魯迅訳《造人術》刊載時間新探——兼及新版《魯迅全集》的相關訛誤」『魯迅研究月刊』2010年第5期 2010.5.20 電字版

劉禾 (LYDIA H. LIU) 著、孟慶澍訳「魯迅生命觀中的科学与宗教」『魯迅研究月刊』2011.3-4期 2011.4.9-5.6 電字版。英文“LIFE AS FORM: HOW BIOMINESIS ENCOUNTERED BUDDHISM IN LU XUN” (“JOURNAL OF ASIAN STUDIES” VOL.68, NO.1, 2009,2) 未見

謝 仁敏「《女子世界》出版時間考辨——兼及周氏兄弟早期部分作品的出版時間」『魯迅研究月刊』2013年第1期 2013.2.20。魯迅「造人術」の『女子世界』刊年を1906年7月上旬とする。

王 家平「魯迅訳作《造人術》的英語原著、翻譯情況及文本解讀」『魯迅研究月刊』2015年第12期 2015.12。神田一三論文を紹介して怪物の背景について言及する。

国 蕊「從“世界奇談”到“女子世界”——再議《造人術》的訳介」『魯迅研究月刊』2019年第12期 2019.12.31。喋血生は陳景韓の筆名だという(36頁)。[艶麗14-34頁][艶麗14-75頁]喋血生(即陳景韓)と同じ。魯迅が読んで底本に

したのは『朝日新聞』連載そのものだという。推測であり確証はない。また怪物の背景について言及しない。

国 蕊「原抱一庵『造人術』全訳兼両版本校考』『魯迅研究月刊』2020年第3期 2020.4.15。『朝日新聞』掲載2回分を漢訳する。論旨は前出論文とほぼ同じ。

賈 立元「第4章第6節 造人、論鬼与“脳電心光”」『『現代』与『未知』：晚清科幻小说研究』北京大学出版社2021.9

符 傑祥「誰は“路里斯託崙”？——魯迅訳《造人術》作者考，兼論女作家“失踪”之謎』『現代中文学刊』2022年第1期（総第76期）2022.2.18。アメリカの女性作家 Louise Jackson Strong の経歴について説明する。H. G. Wells と同時代人だという。怪物の背景について言及しない。また「樽本照雄在文章中就用“他”来称呼，顯然是將其誤認為男性作家了」（37頁）と説明をする。男性作家だと誤認していると指摘した。誤り。樽本は論文においてストロングを呼ぶときは「原作者」「作者」「ストロング」とのみ書いている。日本語男性三人称「彼」は使用していない。漢語の男性三人称「他」を使用して翻訳したのは漢訳者許昌福だろう。他人の論文を批判する時は原文（このばあいは日本語）で確認することが必須だ。手を抜いて漢訳ですますことは許されない。

国 蕊「上帝頌・造人術・吸血鬼——美国小説 *An Unscientific story* 跨文化伝播中的変異与重構』『済南大学学报（社会科学版）』2022第4期（総第32期） 2022.7.15。ストロング原作について女性と児童を読者に想定して科学技術の進歩を批判し神の權威に疑問を提出する宗教作品だと判断する（批判科技進歩与質疑神權的宗教作品。57頁）。怪物の背景について言及しない。

そのほか多数あり

- 6) MIKEASHLEY ed. 'STEAMPUNK: EXTRAORDINARY TALES OF VICTORIAN FUTURISM "NEW YORK: FALL RIVER PRESS, 2012. p.16



もうひとつの漢訳ル・キュー「虚無党奇談」 ——松居松葉『虚無党奇談』

沢本香子



松居松葉はル・キューWilliam Tufnell Le Queux の原作“Strange Tales of a Nihilist”（1892）全12篇のうちから半分の6篇を選択して日訳した。それがウィリアム、ル、キュー原作（扉はウィリアム、ル、キュー原著）『虚無党奇談』（警醒社1904.9.20）である。その日訳6篇すべてを陳景韓が漢訳して「虚無党奇話」になった。それらは数種類の雑誌に分載（1904-1909）されていることも判明している*1。本稿では同じ松葉日訳本にもとづき別人が漢訳した「虚無党奇談」を紹介する。



帝召訳「虚無党奇談」

著訳者、漢訳名と掲載誌などは次のとおり。

俄国威廉盧鳩著、帝召訳「虚無党奇談」
『民呼日報』己酉年八月二十日(1909.10.3)
-九月十六日(10.29) 国立国会図書館所蔵
影印本。印刷不鮮明箇所あり。

連載は新暦10月3-7、10、22、24、29日の全
9回。『民呼日報』は1909年10月3日に創刊さ
れた。紙面下半分に打ちあがる波を描いて「恭
祝 民呼日報出版万歳」と添えている。漢訳
「虚無党奇談」はまさにその創刊号から掲載が
開始された。

漢訳は「第一章 威厳之政府」と題する。9
回で中断した。その内容は松葉日訳の冒頭7頁
までを漢訳したもの。物語の最初部分で終了す
るという中途半端な結果だ。また大幅な加筆が
ある。

ル・キューの国籍を俄国とするのは間違い。
松葉日訳には著者紹介がない。小説の舞台がロ
シアだから誤解したものだろう。また帝召が景
耀月の筆名であることは陳大康年表([編年④
1860])が指摘している。

松葉は「訳者の詞」において「此戦争の紀念
として翻訳を初めた」と書いた。「此戦争」と
は日露戦争を指す。また「此書は実に露国の活
ける歴史と云つても可い」と述べてロシアに関
する知識の増大を目的にもしていることが明ら
かだ。

ル・キュー原作の主人公(即物語の語り手)
はロシアのユダヤ人ウラジーミル・ミハロビッ
チ(Vladimir Mikhailovitch)という。松葉は
日本漢字を当てて浦出見・信露好(うらでみる
のぶろすきー)だ。ミハロビッチがどうして
「のぶろすきー」になるのかはわからない。景
耀月は漢訳して瓦徳彌爾・瑠宝斯克だから松葉
日訳そのままである。同じく、父(Isaac/愛
作あいざつく)は亜札、妹マーシャ(Mascha

/増香ますか)は馬克というぐあい。「ますか」
を馬克とするのは近似というところだろう。

固有名詞が一致する。景耀月漢訳の底本が松
葉日訳であることは明白だ。

ル・キュー原作から松葉日訳を経て景耀月漢訳へ

松葉日訳の7頁までの内容を簡単にまとめる
と次のとおり。

主人公はロシアのユダヤ人だ。ユダヤ人は法
律上も差別されていた。だが父親はサンクトペ
テルブルクの裕福な仲買人だったから家族は上
流社会の生活を送っていた。主人公は家を離れ
て兵学校に入る。演習の毎日だった。ある時か
ら家族からの消息がとどえる。学友が見せてく
れた新聞により父親がシベリア送りになったこ
とを知った。あとで分かったことは父親はつま
らないことで皇帝と不和になり、その結果、突
然に囚人とされシベリアに送られたということ
だった。

その後にくり広げられるのは主人公の苦悩と
残されて悲惨な境遇にもまれる母妹の様子だ。
主要な物語が始まる前に漢訳は中断した。

ル・キュー原作では虚無党と秘密の関係を結
んだ事情を告白することが目的だと主人公に言
わせている。イギリス人は虚無党を殺人同盟だ
と誤解しているからそれを是正したい。とりわ
けイギリス人にこの本を読んで欲しいと希望す
るのだ。この部分の原文は次のとおり。

I. A CROOKED FATE (曲がった運命)

【原文】At the outset it is my earnest desire
to disabuse the minds of English readers
that the Party of Freedom is a mere
murder leagu. p.1

最初に言うておくと「自由党」が単なる
殺人同盟であるという英国の読者の誤解を
解くことが私の切なる願いである。

主人公ウラジーミルがなぜ虚無党員になった

のか。殺人謀略爆殺という手段を使うことがなぜ必要なのか。物語の中でその実際の状況と活動を細かく描写する。虚無党はロシア専制政府から犯罪集団だと認定されている。そこに生きるか死ぬかの苛酷な現実が発生する。虚無党員となった主人公が自分の過去を振り返り反政府に変身した理由の正当性と詳細な経過を物語るのである。小説だから活劇的要素も入れて興味深い事例を多く記述する。読者をあきさせない。

上に示した原作部分の日訳(ルビ省略。以下同じ)と漢訳を引用する。

【松葉】「一 恐しき政府」

此お話をする最初に當つて、私は熱心に英吉利の読者に望まねばならぬ事がある。それは人間の自由を重んずる我虚無党をば、たゞ殺人を是事とする、一個の同盟であるかの如くに思つて居る、英吉利の読者に向つて、其誤解なることを是正するのは、自分の大なる希望であるといふことを申上げて置く事だ。 1-2頁

原作では単に「自由党」と記している。松葉はそのままで日本の読者には理解しにくいと考えたものか「人間の自由を重んずる我虚無党」と加筆した。原文にはない虚無党を前面に出す。それ以外は原文どおりだ。

では景耀月はそこをどう漢訳したか(下線筆者。以下同じ)。

【景耀月】「第一章 威厳之政府(いかめしい政府)」

予述茲事。予深不願英吉利人之能讀吾書也。此輩尤以我珍重自由之虚無党人為一激烈強暴之同盟焉。 10.3付(注:新聞の日付を示す)

言つておくと、私はイギリス人に私の本を読ませたくはない。あの人たちは私が自由を重んじる虚無党員であることを激烈凶暴

な同盟だと考えているからにはほかならないからだ。

最初から奇妙な漢訳になっている。景耀月が「深不願(まったく願っていない)」と漢訳した根拠はどこにあるのか。松葉日訳の「望まねばならぬ」しか該当しない。必要不可欠の「ならぬ」だ。しかし景耀月はそれを否定だと勘違いしたらしい。前後の文脈からして、ぜひともイギリス人に読んでもらいたい、となるはずの文章だ。その程度の日本語理解かといつても景耀月にとっては小さな事だ。どうでもいいことだと気にしなかつただろう。そう感じる。

景耀月漢訳には加筆の傾向がある。

松葉日訳では次のように述べる個所だ。「人間の生命が吾々の目的の為に、屢ば犠牲にされるとは云ひ條、噫!それは吾々の目的ではない、吾々は切に平和を望むのだ」(3頁)

平和を望む虚無党はロシア専制政府関係者を犠牲にするのはしかたがないという説明だ。下線の後半分について景耀月は加筆して次のとおり。そこが問題である。

【景耀月】世之君子。當知人類中之切望平和。嗜安樂者。蓋莫吾党若也。假使吾党得生於英吉利美利堅法蘭西者。予真為善良之民矣。 10.3付

世の君子諸君は知るべきだ。人類のうちで平和を切望し穏やかな生活を好むものは我が党よりほかにはないのである。もし我が党がイギリス、アメリカ、フランスに生まれていれば私は本当に善良な人民になっていただろう。

平和を切望する個所を拡大してイギリスなどを追加した。主人公が語る目的はロシア専制政府の極悪非道暴虐唐制を告発することだ。ロシアだからこそ成立した虚無党にほかならない。それを諸外国ならば、などと仮説を加筆する必

要はなかった。加筆することによって景耀月の認識が疑われかねない。

主人公が幼少時、上流社会のような生活を送っていたのはサントペテルブルク St. Petersburg のリテナイア Liteinaia という地区だ。松葉は笠亭内(りつていない)と音訳した(4頁)。景耀月はそれに笠台里(10.4付)という漢字を当てた。彼は「内」が音訳表記だとは考えなかった。「内」は日本語の「うち」という意味に取り、漢訳して「里」にしてしまったとわかる。小さな個所に景耀月の日本語理解の程度が表出している。

木曜日の晩に主人公が妹と一緒に玄関の上り段のところ立っていると大勢の富裕階級の人々が訪問して来るのを見かけた。該当箇所の松葉日訳と景耀月漢訳を示す。

【松葉】木曜日の晩に玄関の上り段の處に立て居ると、4・5頁

【景耀月】尤憶某木曜日之夕。落日過鄰園之樹。暮霞流艷。直射予院落之牆際及尾頂。長空俱入晚燒。天地一紫。時小鳥亦啾啾爭樹。予籬間之槐柳。幾成戰爭奮鬪之場矣。10.4付

とくに思い出すのはある木曜日の夕方のことだ。夕日は隣りの庭の樹木を通過し、夕霞は美しく、庭の壁と屋根にそそぎ、大空は夕焼けで天地は全体が紫色だった。小鳥は争うようにさえずり、生垣の槐柳はほとんど戦場のようになった。

上流社会だから毎週開催される宴会について言っている。景耀月はある木曜日だけに止まった。どうしても情景描写をつけ加えたくならない。もともと松葉日訳にはない。

来客を眺めている兄妹の服装について原作も松葉日訳も描写はしていない。だが景耀月はここでも詳細に書いている。主人公は薄青の礼服に肩飾り、妹は父親がパリから取り寄せた衣裳

を着た。幸福な幼時の記憶を追加記述する。

好意的に考えれば、加筆によってその後一家を襲う悲劇を際立たせる考えだったといえないこともない。景耀月にはそうすることが必要だった。しかしそれでは漢訳の域を超えてしまう。翻訳ではなく翻案に近くなるという意味だ。

続く10月5日付においても主人公である兄が妹と過ごした往事が回顧される。皇帝が虚無党127人を逮捕しシベリアへ送った時、妹はそれを目撃した様子を記述する。

「虚無党127人」に近い表記は松葉日訳「シベリアの雪」にある。主人公を含めて「老若男女合せて百有余人」がシベリア送りになった(40頁)。近いだけで一致するわけではない。ここは景耀月の創作であると考えられる。

主人公が家を離れて兵学校に入ることになった。ル・キュー原作はあっさりと記述する。松葉もそのままだ。

【松葉】其中私は修業の爲めに家から離れなければならない時が来て、親愛なる両親や妹に別を告げて、檻樓管(ぼろくだ/Vologda)の兵学校へ入ることゝなつた。5頁

ここに該当する景耀月漢訳を示す。

【景耀月】転瞬已達就学之年。彼時不識吾父之志。何以必令予就陸軍学校。10.6付

瞬く間に就学の年になった。その時自分の父親が自分をどうして陸軍学校に行かせる必要があったのか父親の考えを知らなかった。

兵学校に行くというだけの日記に父親の思惑を意味ありげに追加した。あとは両親が息子の出立のためにこまごまと準備する様子を述べる。住み慣れた家から出立する前に長々と惜別の気持ちを書き込む。涙にくれる両親妹との別れだ

った。果ては「私はこの時、この世界がはやく滅びてしまうように激しく望んだ(吾此時甚欲此世界速至末日)」とまで考えるという有様だ。よくもここまでふくらましたと思えるほどの景耀月による創作である。

つづく10月7日付でも父子の別れ場面が停車場において継続する。兵学校へは汽車に乗って行くのかと景耀月の加筆によって読者は知ることになる。もともと松葉日訳には存在しない。

家族愛の物語が展開されている。ゆえに主人公がなぜ虚無党員になったのかを説明するに至らない。

襤褸管(ぼろくだ/ト羅科達)の兵学校は首野鯉(くびのすこひ/科比瑠斯奎)湖畔にある。松葉日訳は学校生活はごくあっさり書いている。

【松葉】私は朝から晩まで演習を事として居る此千篇一律の生活をば、じつと辛抱して送つて居たのだ。5-6頁

それが景耀月の手にかかると大きく変化する。科比瑠斯奎(くびのすこひ)湖畔の気候からサントペテルブルクでは見かけなかった人々のこと、または1812年のナポレオンによるロシア侵攻(1812年戦争)、またボロジノ(保羅箕瑠)の戦いを書き込む(10.10付)。この回の景耀月漢訳も日訳には存在しない。

主人公の父親がシベリア送りになったことを知る場面はいつ出てくるのか。松葉日訳にない景耀月独自の描写を読んでいてこの疑問が生まれてくる。

10月22日付になって上記の日訳に該当する部分が出てきた。

【景耀月】予在学校惟朝暮演習。此外絶無寸毫珍異之事。足娛予心。予性質流動。不耐持久。此千篇一律之生活。10.22付

私は学校で朝から晩まで演習だけでそれ以外に自分の心を楽しませる珍しい事は絶

無だった。私は移り気だったからこの千篇一律の生活には耐えきれなかった。

日訳の「じつと辛抱して送つて居た」と漢訳の「不耐持久(耐えきれなかった)」では反対だ。それを除けば松葉日訳をほぼ漢訳しているといえる。主人公が家族からの手紙をいかに待望していたかを膨らませて詳細に語る。この日の回はそれだけ。なかなか事件に到達しない。

家書が届かなくなり心配が高まる。家族についての悪夢を見るようになった。電報を打とうと電信局に行ったが朝の5時だったから8時まで外で待った(細かい時間は景耀月が加筆したもの)。この10月24日付でも日訳にある家書をめぐって独自に大幅な加筆を行なう。そうしてこの回の最後によりやく松葉日訳を直訳した個所が出現する(固有名詞の翻訳は松葉日訳を使用する)。

【松葉】或朝学友が故山から自分へ送つて呉れたノウオエ、ウレミヤ新聞を見て居たが、或項を指して其新聞を私に手渡した。/「君、これは君の親戚ぢやないか」。6頁

【景耀月】忽一朝晨起。学友朴克寧者冒冒然入。持予郷聖彼德堡瑠威烏奈麦新聞紙。授之予手。指其上曰。瓦德彌爾。此中所載。非君之父乎。10.24付

ある朝起きると学友のパクニンがそそくさとやって来て私の故郷セントペテルブルクの『ノウオエ・ウレミヤ新聞』を手渡し指さして言った。「ウラデミル、ここに書いてあるのは君の父親じゃないか」

『ノウオエ、ウレミヤ(Novoë Vremya)』とはサントペテルブルクで発行(1868-1917)された新聞を指す。学友の名前はない。それを朴克寧と名付ける必要があるのか疑問だ。なにかしらつけ加えたいくなる漢訳者らしい。

新聞に報道された内容を見る。

【松葉】『前週其筋の手によつて捕縛されたる、聖彼得堡聖堂内の猶太人、愛作、信露好は遂に囚人として西比利亞(さいべりあ)に護送せられたり』。7頁

【景耀月】依前月次第。警兵所逮捕聖彼得堡聖堂里猶太人亜札瑙宝斯克一名。決判四流鮮卑利亞。本日遣兵役護送遂至出發。1.29付

先月の状況によれば、警察が逮捕したセントペテルブルクはリツテイナイのユダヤ人アイザック・ノブロスキー1名は、囚人としてサイベリア流刑が決まり本日護送された。

直訳とっていい。景耀月は直訳をすることができる。ゆえに日訳をはずして漢訳する部分を増やすのは彼独自の方針だとわかる。加筆するのだ。関連する次の個所をみてほしい。

【松葉】私は指示された所を熱心に見ると、殆ど私の胸は裂けんとした。そして新聞は私の吐息の下に手から落ちた。6-7頁

【景耀月】予急欲視。而眼転昏花。不辨字画。予力疾省認。急于読竟其事。殆甫啓口未至悉其詳。予手自失能力。紙遂墮地。予亟眩暈而仆。少蘇則予斜倚空几。二三学友伴予左右。1.29付

私は見ようとしたが目がかすみ字が判別できない。私は無理やり読もうとしたが焦ってしまいほとんど口を開けたままでその詳しいことがよくわからない。私の手から力が抜けて新聞は地面に落ちた。急に眩暈がして倒れた。しばらくして気がつくとき空いた椅子にもたれかかっている23の学友が私の傍にいた。

松葉日訳において主人公は新聞の詳細を読む

ている。その衝撃で新聞を取り落としてしまったのだ。それを景耀月は新聞の内容が判読できないかのように書き換えている。しかも失神するまでに強調する。やはり書き過ぎだと考える。

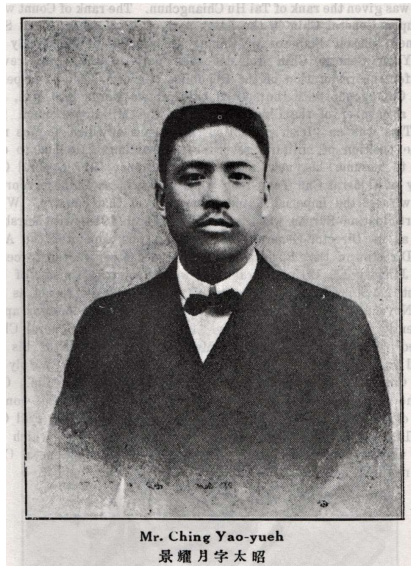
景耀月漢訳は底本を松葉日訳にしているのは間違いない。しかし加筆の度が過ぎる。これでは翻案という方が適切だ。

もうひとつ。以上の漢訳を読んでやや意外な気がしないでもない。景耀月はその経歴からして反清朝政府の立場だ。ゆえに松葉日訳によって提供された物語の枠組みを利用し、反ロシア専制政府(=反清朝政府)の姿勢を強調した論陣を張るのではないかと予期した。しかし加筆してその内容が抒情に流れている。どこにも反清朝政府につながる要素がないのだった。

もっともその後の箇所では反清朝政府をあおる漢訳が出現する予定だったのかもしれない。中断したからただの好意的な想像に終わってしまった。『民吁日報』は同年11月19日には停刊となる。短命だったからどのみち松葉日訳の長篇を漢訳して完結できるはずもなかった。

景耀月について

景耀月(1884-1944)の略歴については橋川時雄『中国文化界人物総鑑』(1940/1982)*2から引用してそのおおよそを見ておく。



Mr. Ching Yao-yueh
景耀月字太昭

『WHO'S WHO IN CHINA 中国名人録』第2巻

景耀月 1884-X 字は太昭、山西芮城の人。光緒二十九年癸卯科の挙人、日本に留学して日本大学の法学士、かつて中華民国臨時政府各省代表会議を組織しその主席となり、南京参議院議員、臨時教育次長兼代教育総長、大総統府高等政治顧問、衆議院議員、経済調査局参議、上海中国公学教授、南京両江法政大学校長、北京大学法学院講師、俄文法政大学講師、内政部警官高等学校教授、東北大学教授に歴任した。また国立北平大学法学員講師を兼任、民国二十五年には同大学工学院中国文講師であった。 589頁

この略歴を見れば政治家、教育家として著名だとわかる。日本大学の法学士だから日本語を理解した。松葉日訳『虚無党奇談』を漢訳したのは不思議ではない。また『民立報』『民吁日報』の主筆を務めたことがある*3。

景耀月が『民吁日報』創刊号から翻訳を掲載したのも自然な経緯だ。

最後にふたつのことに触れる。

景耀月は小説を書いている。召「(畸零小説)貴公子」(『民吁日報』1909.10.25)である。

松葉日訳はまた別の漢訳を生んだ。樽目録より抜粋する。

W0209*

亡国涙 (政治小説) 5続

猶太韋力庵原著 恨海重訳

新加坡『中興日報』光緒34.7.12-9.7 (1908.8.8-10.1)

WILLIAM TUFNELL LE QUEUX "STRANGE TALES OF A NIHILIST" 1892

[編年④1572]原名「虚無党奇談」、光緒三十四年七月十二日(1908.8.8)至九月初七日、未完。連載時一名「俄国之革命党」[大康18-579]同左。起

訖時間不詳、原名不記

[編年④1608]光緒三十四年九月初七日(1908.10.1)未完

[仁敏14-780][仁敏14-781]未完

[美高13-53]政治小説、猶太韋力庵原著、1908.8.10のみ、原名「虚無党奇談」

[清民報1129]「俄国之革命党」、1908.8.6至1908.10.1、期中自1908.8.8始改爲「亡国涙」、包含一「秘密結社的原因」、二「西比利亞之雪」

新加坡『中興日報』は残念ながら見ていない。記録するとどめる。 罫

【注】

1) 以下を参照。

詹 宜穎「虚無党小説の跨境旅行——關於 *Strange Tales of a Nihilist* 英、日、中三個版本の考察」『東亞觀念史集刊』第13期 2017.12 電字版

梁 艷「“佚失”的《(虚無党小説)俄国皇帝》下篇——陳景韓轉訳 *Strange Tales of a Nihilist* 發表始末」『清末小説から』第145号 2022.4.1

神田一三「陳景韓漢訳ル・キュー「虚無党奇話」——松居松葉『虚無党奇談』」『清末小説から』第147号 2022.10.1

2) 橋川時雄『中国文化界人物総鑑』北京・中華法令編印館 1940.10.25 初版/名著普及会復刻 1982.3.20

3) 景耀月関係の文献をいくつか挙げる。

○佐藤三郎『民國之精華』第1輯 北京写真通信社1916.12.20 国立国会図書館デジタルコレクション収蔵。影印本による。

光緒三十年、山西大学堂より選派されて日本に留学す。同盟会に入り、全部の留学生間に中国財政研究会の組織あるや、其の正会長に挙る。自ら国報雑誌を發刊して革命を鼓吹す。宣統二年日本大学法科を卒業して帰国す。296頁/台湾影印本1967.3

○『WHO'S WHO IN CHINA 中国名人録』第2

卷 1925年(龍溪書舎1973影印本) 刊登の景耀月照片あり

1910東京帝国大学で LL.B. (法学士) を取得(202頁)。ここは橋川という日本大学法学士と異なる。

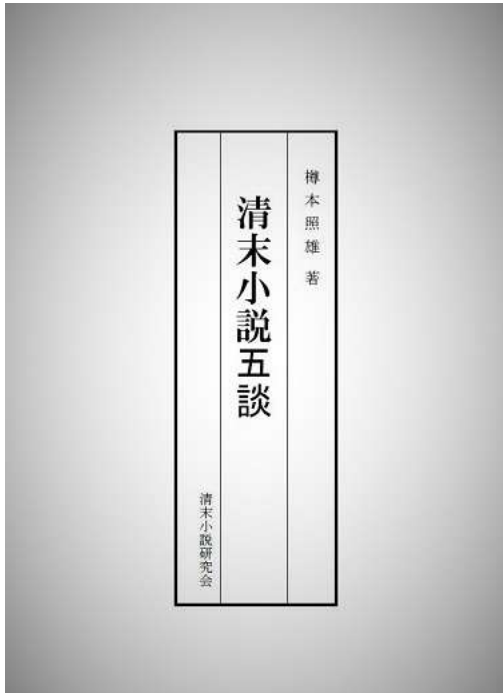
○曾虚白主編『中国新聞史』台湾・国立政治大学新聞研究所1966.4初版未見/1977.3四版

1910年10.11、上海で創刊された革命派の新聞『民立報』がある。主筆として宋教仁のほかに景耀月(帝召)、馬君武、葉楚傖、談善吾(老談)などが揚げられる。272頁

○史和、姚福申、葉翠娣編『中国近代報刊名録』福州・福建人民出版社1991.2

『民吁日報』は上海で創刊。1909年10月3日-11月19日という短命に終わる(139頁)。于右任が編集長で景耀月が主筆だった。

公開予定



清末小説研究会 <http://shinmatsu.main.jp>

漢訳デラノイ『鉄錨手』の原作

荒井由美

『(偵探小説)鉄錨手』はバーフォード・デラノイ Burford Delannoy 原作の漢訳だ。漢訳題名を訳せば『錨の腕』である。探偵小説だから内容が想像できないようにしたのだろう。その意味ではうまい翻訳だ。

デラノイは筆名、本名は Adolphus Eugene Judge (1856-1931) というらしい (At the Circulating Library による)。

原作については中村忠行がすでに推測している。簡略化して示せば次のとおり。

[中村 S3-48] 角書不記、光緒三十二年九月、説部叢書第六集第五編、H. BURFORD DELANNOY : “*THE MARGATE MURDER MYSTERY*” 1902?

「？」の表示があることに注目すべきだ。重要な意味を持つ。中村は推測したが確定したわけではない。ついでながら中村の記す「H. BURFORD DELANNOY」は「H.」がなくても同じ。

書物全体の説明をしておく。私が見ている版本を示す。

(英) 般福德倫納著、商務印書館編訳所訳『(偵探小説)鉄錨手』42章 上海・商務

鉄锚手(The Margate Murder Mystery)	[英]般福徳伦纳(H. Burford Delannoy)著 商务印书馆译	1906.9	上海:商务印书馆	说部丛书六集第五编
		丙午九月(1906)/1914.4 再版		说部丛书初集第五十五编

任翔、高媛主編『中国偵探小説理論資料(1902-2011)』602頁

の原作ではない。前出のとおり医師「馬互」が Margate だと中村は推測した。しかし Margate (マーゲート) は英国の地名だ。マーゲートのホテルで女性が死体で発見された。そういう新聞報道があって物語が進行する。残念ながら該作については推測外れである。中村は英文原作が入手できなかった。1970年代日本のことだからそれはしかたがない。

2 中村説の影響

中村の推測したものは原作ではないことが今では判明している。すると意外なところに影響を与えていたことが浮き出てきた。中国の文献にそれを見る。

上記の表は任翔、高媛主編『中国偵探小説理論資料(1902-2011)』(北京師範大学出版社2013.3. 602頁)にある。樽目録第3版(齊魯書社2002)から無断借用した。なぜわかるのかその理由がある。“THE MARGATE MURDER MYSTERY”を掲げる文献は中村論文を引用した樽目録第3版にしか存在しないからだ。その典拠を示さない任翔らは無断借用したといわれても否定できない。しかも原文には存在している「？」を削除した。どうみても任翔らが原作として独自に特定したことを示している。

原作が間違っているとすると典拠を示していないから他人に責任転嫁することができない。自己責任ということになる。

3 注目点にもどる

注目点2の商務印書館編訳所訳である。中村はその表記についてひとつの説明を行なった。売り込み原稿であろうという。

確かに訳者には個人名を出すばあいと編訳所名義にするものに分かれる。売り込み原稿であれば買い取り原稿でもある。言われてみればそうかもしれない。中村以外に解説する例を見ない。可能性のひとつを示した。卓見である。

もうひとついえば訳者が商務印書館の社員であるばあいもあるだろう。編訳所に所属していればそうなる。人物を特定する材料はない。商務印書館社員が売り込みしたにせよそれ以上のことは不明である。

ところがこの『鉄锚手』については別のところに解答が出されていた。珍しいといえる。後で述べる。

注目点3は翻訳者が日本留学経験者だという。唐突に出されている。根拠が示されていない。中村の長年にわたる研究の経験からそう結論したのだろう。そのような例を多く見てきたところからくる考えだと思う。

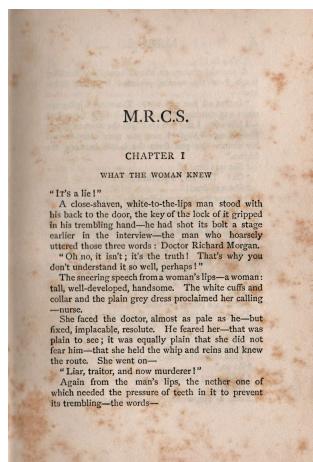
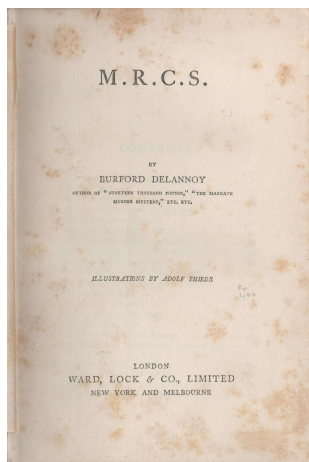
こちらも注目点2に関連して解明されることになる。

4 原作の特定

漢訳作品の原作を探求するばあい多作の作家では接近方法に工夫が必要だ。最終的には作品本文を照合する。しかし効率よく探索するためには章の数を見ることがある程度有効だといえる。清末民初の翻訳はよほどの省略をしない限り原作の章立てを守っているばあいが多。ただし絶対的な基準にはならないことはいうまでもない。個々の作品による。

『鉄锚手』の漢訳は42章だ。デラノイの作品もそこを見る。前に紹介した THE MARGATE MYSTERY は16章だった。章立てからして違う。

そうして見つけたのが BURFORD DELANNOY,
M. R. C. S. (WARD, LOCK & CO.,
LIMITED, 1903) である。



冒頭を分割して対照する。

【原作】“IT'S a lie!”

A close-shaven, white-to-the-lips man stood with his back to the door, the key of the lock of it gripped in his trembling hand—he had shot its bolt a stage earlier in the interview—the man who hoarsely uttered those three words: Doctor Richard Morgan.

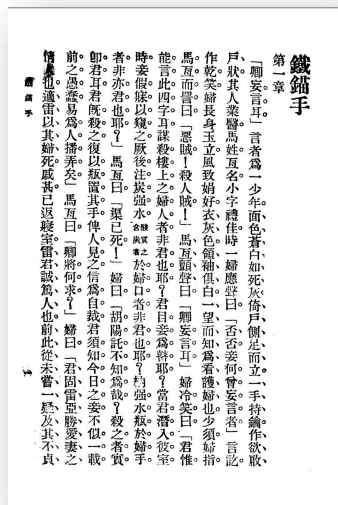
「ウソだ！」

ヒゲをきれいにそり白い唇をした男がドアを背にして立ち彼の震える手に鍵を握っていた—彼は話をする前にドアにかんぬきを掛けていたのだ—「ウソだ」と3語をかすれ声でもらすその男はリチャード・モーガン医師である。

【鉄錨手】「卿妄言耳」言者為一少年。面色蒼白如死灰。倚戸側足而立一手持鑰。作欲啓戸狀。其人業医。馬姓互名小字礼佳。

「でたらめだ」そういうのは若者だった。顔色は蒼白で死人のようだ。ドアに寄りかかり片手に鍵を持って開けようとしていた。その人は医者で姓は馬、名は互、小字は礼

佳である。



『鉄錨手』

「man (男)」が漢訳では「少年(若者)」になるのは許容範囲内か。顔の表情については原文どおりにはなっていない。「面色蒼白如死灰(顔色は蒼白で死人のようだ)」と書き直した方が中国の読者には理解しやすいという訳者の判断かもしれない。

同じ流れかと思うのが医者の名前を記述する部分だ。「馬姓互名小字礼佳」は日本語になおせば「姓は馬、名は互、小字は礼佳である」とせざるをえない。それが普通である読者は不思議に感じなかっただろう。しかし分解すると奇妙なことになる。姓は「Mor (馬)」名は「gan (互)」小字は「Richard (礼佳)」だ。なぜ「姓馬互名礼佳」と漢訳しなかったのかと疑問に感じる。漢語では「馬互」という姓はないという意識が働いたものだろうか。原作が英語だから漢語の慣例から外れてもかまわない。それが翻訳ではないか。だが『鉄錨手』の訳者はそうとは思わなかったらしい。それにしても原作者を漢訳して般福德倫納にしているだけに不統一だと感じる。

【原作】“Oh no, it isn't; it's the truth! That's why you don't understand it so well, perhaps!”

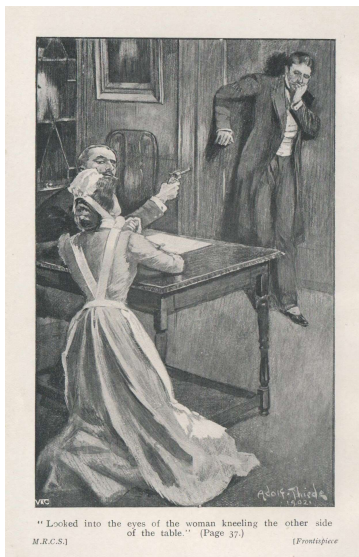
The sneering speech from a woman's lips—a woman: tall, well-developed, handsome. The white cuffs and collar and the plain grey dress proclaimed her calling—nurse. p.7

「いえ、違うんです。本当です！たぶんそれがあなたがよく理解しない理由なのですわ！」

女性の口から冷笑的な言葉が出た。その女性は背が高く、健康そうで美人だった。白い袖と襟、無地の灰色の衣服は「看護婦」とよばれていることを公表していた。

【鉄錨手】時一婦応声曰「否否。妾何曾妄言者」言訖。作乾笑。婦長身玉立。風致娟好。衣灰色。領袖俱白。一望而知為看護婦也。1頁

その時ひとりの女性が答えて言った。「いえいえ。ウソではありません」そう言い終わると作り笑いをした。女性は背が高く美しく灰色の衣服で襟と袖が白い。一目見てすぐに看護婦であることがわかった。



看護婦絵図

中村のいうように漢訳に記号「」を導入して原文をほぼはらず漢語に移している。

5 『M. R. C. S.』が『鉄錨手』になる理由

さて原作の『M. R. C. S.』は Membership of the Royal Colleges of Surgeons of Great Britain and Ireland (MRCS) の略称である。イギリスアイルランド王立外科医院会員と言われる。あるいは Member of the Royal College of Surgeons という説明もある。簡単にいえば外科医師の資格を有していることを証明するものだ。

ドイルの『バスカヴィル家の犬 The Hound of the Baskervilles』（1901-1902雑誌連載、単行本1902）第1章冒頭に出てくることを思い出す人もいるだろう。ステッキに「To James Mortimer, M. R. C. S., from his friends of the C. C. H.」と刻印されているのがそれだ。こちらでは「王立外科医学校免許証所持者」と翻訳されている*3。

原作の書名はひらたくいえば単なる『外科医』である。それを見た漢訳者にはいくつかの選択肢があったはず。漢訳するばあいはそのまま『外科医』にするのもひとつのやり方だ。しかしそれでは探偵小説らしくない。考えて『外科医生案』とか『外科医生殺人案』でもよかった。ところが出てみると『鉄錨手』という題名になっている。その理由はなにか。

探偵小説の漢訳であるばあ題名に無頓着だと犯人をばらしてしまうことがある。訳者の知恵の出どころとっていい。

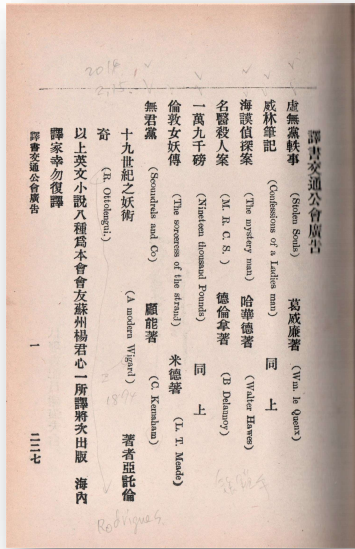
『鉄錨手』は被害者のひとりが「腕に錨の刺青を入れていた」からだ。その片腕が瓶に入れられていたという猟奇的な場面に由来する*4。

意外に思われる題名が「偵探小説」という角書とよく合致しているように思う。

原作が『M. R. C. S.』だと判明すると関連する文章が浮かんでくる。

6 漢訳者は楊心一

「訳書交通公会広告」(『月月小説』第2号
光緒三十二年十月望日1906.11.30)である。



訳書交通公会とは漢訳書についての情報を共有交換することを目的とする組織だ。翻訳中の作品について原書名、翻訳名および著者の姓名を該会に提出する。公会でそれをまとめ会員に配布するという。つまり翻訳が重複しないように調整する意味も持たせる。発起人は周樹奎桂笙だ。賛同者に呉沃堯阡人、汪慶祺惟父の名前があげられている(以上は該誌第1号の「訳書交通公会試辦簡章」による)

その具体的な書名が該誌第2号に掲載された。英文小説8種が原作名とともに掲げられている。その中の2種類がデラノイ原作なのだ。

名医殺人案 (M. R. C. S.) 德倫拿著 (B Delannoy)
一萬九千磅 (Nineteen thousand Pounds)
同 上

さらにはその訳者まで明らかにしている。「本会会友蘇州楊君心一所訳」という。

『M. R. C. S.』についていうと上に見る漢訳名、原作名、原作者漢訳名などは実際に刊行されたものと微妙に異なる。

作品名、原作者についての表記に変化がある。

訳書交通公会→単行本の順に並べる。

名医殺人案→鉄錨手/德倫拿→般福德倫納、

細かな手直しがあったとわかる。公会広告の『名医殺人案』は仮題だったらしい。『鉄錨手』と比較しても劣らない題名だと思う。德倫拿と德倫納では末尾1字が異なる。

奇妙なのは発表時間だ。『月月小説』第2号の刊行は光緒三十二年十月である。ところが商務印書館の初版がそれ以前の同年九月だ。なにかちぐはぐな感じを受ける。告知をしたときにはすでに商務印書館から刊行されているのはなぜなのか。しかも楊心一の名前が消滅して商務印書館編訳所名義となっている。売り込み訳稿は実名をだしてはならないというわけではなからう。楊心一の名前がなくなった理由はわからない。

7 楊心一について

楊錦森(字は心一、1889-1916)は光緒三十三年(1907)に郵伝部高等実業学堂商務専科を卒業、同年アメリカのペンシルベニア大学に留学、5年滞在した後の1911年に帰国した。『時報』『小説時報』『東方雑誌』『法政雑誌』などに翻訳を含んだ多くの文章を発表している。1913年からは中華書局英文編集部勤務した。数えの二十八歳で逝去⁵⁾。

郵伝部高等実業学堂は1905年に南洋公学が改名したものだという。

楊心一の翻訳は複数『月月小説』に掲載されている。それは渡米の1907年以前の事だ。『神州日報』にも掲載される翻訳がある。时期的に留学とかぶさっているように見える。留学の前に手渡していたのかもしれない。『小説時報』掲載分は帰国後のことである。

『鉄錨手』の初版は1906年だから留学以前だ。英語が堪能だったからこそアメリカ留学生

に合格したのだと思われる。

その略歴からいえば楊心一はアメリカ留学生出身ということになる。ただし『鉄錨手』については留学以前の翻訳だから留学歴とは関係がない。

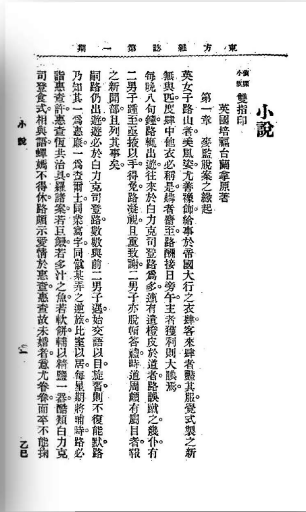
8 『(偵探小説) 雙指印』のこと

デラノイに関連して『(偵探小説) 雙指印』に触れておく。

(英) 培福台蘭拿著 未署訳者名「(偵探小説) 雙指印」『東方雜誌』2年1-5期 光緒31.1.25-5.25 (1905.2.28-6.27)



孔夫子旧书网



東方雜誌

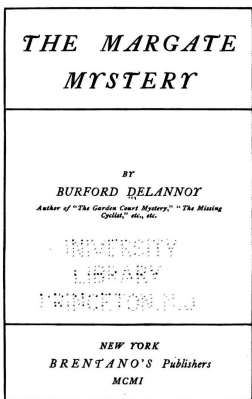
のちに商務版「說部叢書」、「小本小説」叢書に収録された。これについても前出中村の説明がある。引用する。

この小説(注：雙指印)の原作者については、『說部叢書』本では奥付にその記載がなく、誰とも判明しない。従つて、阿英氏の書目にも、これを逸してゐるが、『東方雜誌』掲載の方には、「英・培福台蘭拿著」とある。これを何と訓むか。「般福德命納」と同列に置いて、H. Burford Delannoyの音訳と見ることも不可能ではなささうであるが、未だその自信はない。51頁

中村は培福台蘭拿についてバーフォード・デラノイと読むことを躊躇した。その必要はなかった。まさにその通りデラノイなのだ。しかも「雙指印」の原作こそが前出 *THE MARGATE MYSTERY*. 1901 (または、*THE MARGATE MURDER MYSTERY*. 1902) なのである。

楊心一がデラノイを漢訳して般福德倫納あるいは徳倫拿だった。『雙指印』は培福台蘭拿だ。微妙に違う。しかし違いは違いである(原作と漢訳の書影を掲げる。ただし漢訳は省略があるから英文原作とは一致していない)。

商務印書館が版元である『東方雜誌』に連載された。訳者名は不記。その後商務版「說部叢書」に収録されて商務印書館編訳所訳だ。編訳所の社員が漢訳したと考えていいだろう。記号の「」は使用していない。それを多用した楊心一とは異なる。 ㊦



THE MARGATE MYSTERY

PART I

TWO MEN AND A WOMAN

I

THEY were of the bourgeois—the little trinity whose doings are, *inter alia*, chronicled herein—two men and a woman. As the foundation of a story, that composition seems to lack novelty, still it is one which necessarily entails complications, and the old French proverb applies. If you would seek elucidation of the mystery, search for the woman—or, rather, in this instance, the women, for as this story grows, the trinity merges into a quartette, and the feminine element plays a strong hand. There is a saying that people who live in Brixton smelt of it. The trinity this story starts with was particularly redolent of that southern or south-eastern suburb.

【注】

- 1) 寅半生「小説閑評」『遊戯世界』第1-18期/阿英編『晚清文学叢鈔・小説戯曲研究巻』北京・中華書局1960.3上海第1次印刷/台湾・文叢出版公司1989.4影印本
- 2) 中村忠行「清末探偵小説史稿——翻訳を中心とし

て(2)『清末小説研究』第3号1979.12.1。49頁

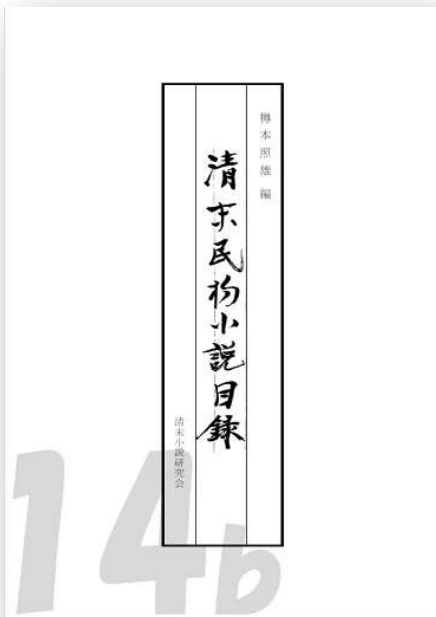
- 3) 富山太佳夫訳、小池滋監訳『詳注版 シャーロック・ホームズ全集 5』ちくま文庫、1997.8.25。330頁。C. C. H. についてワトソンは何かの狩猟クラブ (the Something Hunt) ではないかという。ホームズがチャリング・クロス (Charing Cross) ではないかと答えてチャリング・クロス病院 (Charing Cross Hospital) が導き出される。335頁

- 4) 該当する部分を原文と漢訳から引用する。

It is in the shape of an anchor, a tattoo mark on the same hand that the finger was missing from. p.395/蓋青某右手缺一指。而腕際鏤一鉄錨。91頁

We went further, Sir, and I was horrified to find on the shelf in a room a bottle. In that bottle, Sir, was a hand—a hand without a finger, and on the hand was a tattoo mark of an anchor. p.395/余於一室獲一瓶。瓶中貯一人手。手缺一指。腕際鏤一鉄錨。92頁

- 5) 略歴については次を参照した。姜榮剛「晚清留學生小説家楊心一生平事迹新考」『許昌学院学報』2012年第1期 (第31卷第1期)



清末小説研究会 <http://shinmatsu.main.jp>

呉橋漢訳小説の特色

樽本照雄

漢訳についての低い評価、あるいは評価の変化

清末民初小説に対する評価は高くない。それには理由がある。文学革命派が主流を占めた五四以後の中国学界は清末民初の作品を目の敵にした。自分たちが乗り越えようとした障壁であったからだ。また前の時代を否定して今いる自らの正当性を主張するためでもある。公正を求めるほうが無理なのだ。しかしその影響力は強い。世界に波及している。

翻訳小説になるとほとんど罵りに近い言葉が投げつけられる。翻訳する価値のない外国の駄作を多く取り上げた、もとの戯曲を小説化した、誤訳が多い、勝手な加筆、削除を行なった、などなど。林紓を批判した言葉だ。しかしその負の側面が漢訳小説全体に押し広げて適用され「常識」になった。「常識」だから誰も疑うことはない。

後の研究者は学界の清末民初翻訳についての「常識」を当然のように学習し努力の末に自分の血肉にした。それ以外は受けつけない人々が量産されたことをいう。中国以外でも同様だ。研究者にはそれが動かぬ拠りどころとして各自の背後にある。その結果に悲劇が生まれるのは必然となる。

バーサ・M・クレイ原作が漢訳されてふたつの作品になった。ある研究者は先行論文を参考

にしつつ漢訳2作品が同一原作にもとづくという前提を定めた。それを確認する論文を書く。原作を含めた3作品の登場人物名を対照した(2018)。その結果は漢訳2種ともに原作とは一致するところがまったくない。原作に登場しない人物は漢訳者が勝手に創作したと説明した。原作とはかけ離れた漢訳人名であることを疑問に思わない。漢訳者が自由勝手な漢字を当てているとあくまでも固く信じている。その自信はどこから生まれるのか。

答えは簡単だ。清末民初の漢訳がでたらめだという学界の誤った「常識」をその研究者が受け入れているからにはかならない。当時のいい加減な漢訳だからまったく別の名前を使用することは普通にあるという理屈だ。結論が先行している。無理やりこじつけているという意識が皆無である。先行論文と自分はいくまでも正しい。清末の漢訳者の方が誤っている。先入観で固まった判断姿勢は複数の論文で変わらない。

普通、それほど異なった訳語ならば奇妙に感じるのではないか。原作にない人物を漢訳者が作るのをおかしいと思わないのか。調べてみれば英語原作とは関係のない別々の漢訳だった。漢訳2種の原作者はクレイではあっても異なる作品である。原作が違うのだから人名が相違するのは当然だ。筆者は批判しているのではない。その研究者は中国学界の「常識」を正直に鵜呑みしたことによって犠牲者になったといえる。痛ましい。気の毒に感じる。

林紓についての事例をあげる。文学革命派は特別に的を絞って林訳を批判した。彼らの目的は罪もない林紓を引きずりだして主敵に仕立てあげることだった。林紓は戯曲を小説にかえて翻訳した、戯曲と小説の区別がつかない、と虚偽をでっち上げて非難した。これが歴史的事実だ。不可解なことに同時代およびその後の研究者たちは誰も林紓を擁護しなかった。世界中の研究者が林紓を罵る快楽に没入し続けた。

そこに新しい資料が発掘された。その結果、

近代中国文学史上まれにみる冤罪事件であることが判明する。中国学界の「常識」が転覆した。1918年の「双簧戯(なれあいの芝居)」(『新青年』掲載)から始まって2007年まで林紓は無実の罪を着せられていた。その時間は十分すぎるくらいに長い。

それを知った中国のある読者は驚いたようだ。このような定説を覆す問題について外国の研究者に頼らなくてはならないのか、あなた達は書くことができなかつたのではなく書く勇気がなかつたのだ、と正直な感想を書き込んでいる(豆瓣読書2021.3.10)。中国の研究者は外国人からの指摘を嫌う。それが日本からだ怒りが倍増するのを経験で知っている。日本小説の登場人物に成りすました中国人が反撥して日本人の著作に低評価を下す(2022.11.23)。屈折しているから笑う。中国学界の「常識」が一般人にも浸透していることが明白だ。嘲罵したところで林紓冤罪の事実は微動だにしない。

一時期あれほど激しく展開していた劉鉄雲「老残遊記」批判だった。胡適批判でも同じことだ。現在は知らぬ顔をして正の方向で評論する。それらを見れば中国学界の価値判断は不変のようである。時代によって上級の判断も変化するという先例だ。ゆえにこれまで長年堅持していた林訳批判を今後どう処理するのか興味深いことになる。

林紓批判を維持していた中国学界の影響が日本にいる瀬戸博士の論文に露呈しているのも不思議ではない。立論の方法は昔からある使い古されたものだ。林訳を批判するという目的を最初に定める。それに向けて従来からある資料を配置しなおす。新資料により林紓の冤罪が証明された。だがそれすら捻じ曲げて論点のすり替えに用いた確信犯だ。林訳批判の資料が不足すれば捏造した。それが瀬戸宏『中国のシェイクスピア』(松本工房2016.2.29)である(のちに漢訳。(日)瀬戸宏著、陳凌虹訳『莎士比亞在中国:中国人的莎士比亞接受史』広州・広東

人民出版社2017.1)。中国学界に事大する瀬戸博士にしてみればどこが悪いかというかもしれない。結果とし東京大学教授、慶應大學教授、華東師範大学副教授を巻き込んで彼らに軽く致命傷を負わせている(瀬戸著作の嘘にまみれた林訳批判部分を賛美あるいは黙認するという間違った書評を書いたことを指す)。

樽本照雄著、李艶麗訳『林紓冤案事件簿』(北京・商務印書館2018.7。底本は樽本『林紓冤罪事件簿』清末小説研究会2008.3.31)が出版された。刊行したのが商務印書館であることが重要だ。すなわち林紓冤罪の事実を公認したと理解できる。今後は批判を保留するという合図を発信したことに等しい。中国学界そのものが林訳評価に関する基本方針を転換した。その意義は小さくない。

ところが瀬戸博士は変化に気がつかなかっただけで、北京の商務印書館創業120年国際学術研討会に参加して従来通りで変わらぬ林紓批判の漢語論文を重ねて発表した。瀬戸宏「商務印書館版《吟辺燕語》的文化意義——再論林紓的莎士比亞觀」(『中国出版史研究』2019年第4期 2019.12)だ。以前、瀬戸博士の日本語文章について次のように書いたことがある。「私が今まで読んできた漢訳シェイクスピア関係の論文のなかで、瀬戸博士のものは最悪最低である」。瀬戸博士の漢語文章はこの判断をより強固なものにした。樽本照雄「林訳の改編者表記——瀬戸博士の嘘と捏造」(『清末小説から』第140号 2021.1.1。のち樽本『清末小説四談』2021.5.1所収)で詳しく述べた。

林訳を含めて清末民初の翻訳群は不当に低く評価されていると繰り返す。必要なのは批判することではない。当時の翻訳作品の内容がどうであったのか、原作の発掘と翻訳文そのものを具体的に検討することが不可欠なのだ。いまだに原作不明の漢訳作品がいくつもある。原作探索の困難さをそこから推し量ることができる。

もうひとつ知っておくべきことがある。清末

民初の翻訳界に外国作品は原書から直訳しなければならないという認識はなかった。漢訳者は自分が理解する外国語を通じて作品を選択した。重訳になることは珍しいことではない。また訳者が底本を自由に変更する、加筆する、削除するなどの行為が普通に見られる。容認されていたというよりも原作を知らない読者は誰も気にしなかった。だいいち原作、底本などを明記する習慣さえ存在しなかったのだ。創作のつもりで読み始めたら内容から翻訳だと気づくことも当たり前で発生する。もし直訳しない漢訳は翻訳ではないと批判するならばそれは清末民初における翻訳の実情を無視した発言だ。現在の基準を過去に当てはめて糾弾するのは研究とはいえない。

その時代に必要とされ適合する翻訳の形が存在した。内容をざっくり把握し細部にはこだわらない豪傑訳もその存在理由がある。底本を改変して翻案にする作品も出る。忠実な翻訳ではないと切り捨てることは好ましい態度ではない。過去の漢訳を否定してどうしたいのか。そうではなくどの部分をどのように削除要約して豪傑訳になったのか、どこが翻案なのかを詳細に探ることが大切だ。そうしてこそ建設的な研究になる。

呉禱漢訳小説の特色

本稿では呉禱の漢訳小説いくつかについて簡単に説明する。詳細は各論を見てほしい。

創作は「開国会」(1907)、「革命軍」(1911)、また陳鵬安(2022)によるとほかに「淞浦狂瀟記」(1919)、「新東厨司令登庸記」(1919)、「寓言小説黄龍陣」(1920)、「社会実写小説弱女救災記 一名歳寒松」(1920)があるという。それらに加えて坂口榎次郎著『成吉思汗少年史』(1903)および松村介石著『社会改良家列伝』(漢訳刊年不明)も説明の対象にはしない。また未見の作品については発言を控える。

漢訳小説作品のおおよそは文末に原作者の国別に簡単な目録を作成したから見てほしい(呉禱漢訳小説の底本と原作一覧)。原作不明3種があるから完璧というわけにはいかない。輪郭を示したとご理解いただきたい。

一覧によれば呉禱漢訳小説は1905年から1913年に公表されている。ただし1908年から1912年までは空白、あるいは未発見である。いまのところわかっているのは実質4年間に7カ国22作品を清末民初の社会に送り出したことだ(呉禱漢訳の国別集計)。その漢訳全体が1919年の五四以前であることは注目にあたいする。

おおまかな分類で短篇13種(うち底本の雑誌『太陽』掲載は10種)、中篇3種、長篇6種である。白話を使用した漢訳が20種もあるのは時期的に見て画期的であり特徴的だ。

翻訳家の活動として4年間に22作品というのは数的にはどうなのか。そのうち短篇が約6割を占める。全体をみれば作品数は少ないといわざるをえない。そこから推測すれば呉禱にとって翻訳の仕事は専業ではなかった。専業であれば漢訳作品はもっと多いはずだ。

呉禱は以前に愛国学社で歴史、地理の教科を担当した。愛国女学では伝統音楽を教えたこともある。それくらいしかわかっていない。ただし書家としての呉禱に注目すれば日訳小説を漢訳したのは余技の可能性が高い。彼を経済的に支えていたのは主として書家の活動であったということになる。1900年頃頃からだからかなり早い。

漢訳を専業とはしていなかったとしても選択した作品そのものは充実している。

呉禱はポーランド1種、ロシア3種、ドイツ1種を日本語経由で漢訳した。ロシアのチェーホフ、レールモントフ、ゴーリキーなどの作品は清末においては早期の紹介になる。異色だと言わなくてはならない。それを強調する中国の研究者は阿英を含めて多い。呉禱漢訳といえ

ロシア作品をあげるのが以前の中国学界では定説だった。

呉禱漢訳小説で言うべき特色がひとつある。底本に日本語小説を使用したことだ。日本人作家の作品は5種ある。残りの17種は日本語に翻訳された海外6カ国の作品だ。そこで呉禱漢訳小説研究には日本語の知識が必要となる。翻訳内容を検討するばあい底本の日本語作品を使用するのが原則だ。日本語の壁がある。呉禱漢訳を対象とする研究者が少ない理由のひとつとなる。

それに関連する例あげる。呉禱漢訳『銀鈕碑』(1907)について阿英が不可解な紹介をしている。呉禱はレールモントフ作、嵯峨の家主人訳「当代の露西亜人」(1904)を底本とした。レールモントフ『現代の英雄』に収める「ペーラ」部分だ。もともと全訳ではない。しかし1907年というのはかなり早い。

阿英は呉禱漢訳の冒頭部分を引用した(1938初出未見。『小説四談』1981。233頁)。つづいて日本語底本を提出して比較検討すべきところだ。ところが阿英は楊晦が英訳から重訳する『当代英雄』(1930)の関連部分を引いて呉禱漢訳と対比させた。論の進め方が基本的に間違っている。異なるものを並べて両者に少なくない差異があるという。見当違いもはなはだしい。阿英は日本語底本について知識がなかった。不十分な説明にならざるをえない。呉禱漢訳を顕彰するつもりがだいなしになっている。清末文学研究の権威である阿英がそういう杜撰な文章を書いた。残念以外のなにものでもない。

現代のある研究者も同じことをしている。チェーホフ作、薄田斬雲訳「黒衣僧」を呉禱が漢訳して『黒衣教士』である。その研究者が呉禱漢訳を比較検討する際に使用したのは斬雲日訳ではなかった。ロシア語から直接翻訳した1992年の漢訳本を主に取り出した(2013)。結論が説得力を持たないのは当たり前だ。それが学術誌に掲載される。関係者は研究方法が誤

っていると気づいていない。問題の根が深いことを示している。現在まで阿英の影響力が及んでいることがわかる。

呉禱漢訳小説についていえば選択した作品の題材が多彩で豊富である。少年少女小説から冒険小説、探偵小説、裁判小説、恋愛小説、復讐譚、恩義と友情、虚無党、催眠術、精神錯乱、ロシア人と異民族など多方面にわたっている。

同じところに前述林訳小説がある。林紓のばあいは活動時期が長かった。1899年から死後の1925年にも林訳は公表されている。主として英語とフランス語に堪能な共訳者が多数いたから翻訳数も200種前後にのぼる。数の上では比較のしようもない。だが呉禱漢訳は林訳とは重複しないのも特色のひとつだ。林紓には共訳者がいたのと同じく呉禱には日本語翻訳があった。口述者と日本語本の違いはあるが翻訳方法は共通する。多種多様な日訳の中から選択して22種の呉禱漢訳が生成された。

呉禱は日本語をどこでどのように学んだか。その詳細は明らかになっていない。以前の研究論文では呉禱は日本に留学したと普通に書いていた。そういうだけで誰もその証拠を提出してはいない。

筆者が考えるに呉禱は日本に留学はしていない。ひとつの根拠は留学生名簿などに呉禱の名前が見えないからだ。呉禱は書物で日本語を学んだと思われる。その場所は上海かどうか不明である。

もうひとつの根拠は誤読だ。呉禱の漢訳作品を読むと日本語のひらがなカタカナ読みについて誤解するところがある。

小さな例をあげると「ツ」と「シ」を混同して漢訳する。「英国勃拉錫克」がその見本だ。英人「ブラック」の「ツ」を「シ」と見間違っ て漢字の「錫 xi」を当てた。

あるいは日本語の副詞を知らずに取り違える。日本語底本に「中学校からの帰路に、ハタと行き逢った」という個所がある。「ハタと」は副

詞で「思いがけず」「ふっと」「やにわに」という意味だ。呉禱はそのカタカナが理解できなかった。「向他姨母家黒塔街緩緩行走(彼のおばの家にむけてハタ街をゆっくりと歩いた)」とした。「ハタ街(黒塔 heita 街)」という場所名に誤訳している。日本に留学していたならばそのようなことはないだろう。

呉禱の誤訳は日本語能力に関係するが別の側面を明らかにしている。意味不明の箇所は普通ならば漢訳しないのではないか。しかし呉禱は努力したうえで結果として間違っ た。そこには日本語底本に忠実であろうとする彼の翻訳姿勢が見える。誤訳がかえって彼の漢訳者としての誠実さを浮かび上がらせるのだ。

日本に留学しなかった包天笑が日本語作品の漢字を拾って漢訳したのと似ている。ならば日本に留学した陳景韓が正確に漢訳したかと問われればそうとばかりはいえない。最初は直訳し次に翻案して最後は創作した作品がある(『俠恋記』1904)。作家としての側面が強く出ているのだ。あるいは長篇小説を強引に短縮して冒頭部分だけを出した。漢訳短篇『新蝶夢』(単行本1906)である。奇妙きわまりない。包天笑もその事を回想してあきれていた。日本語理解度の問題ではなく翻訳に対する個人の姿勢に起因する。

包天笑、陳景韓らは翻訳といいながら日本語作品を利用して自分の創作をすることがたまにある。それらに比べれば呉禱漢訳は基本的に異なる。日本語底本を尊重しながら漢訳したことを指す。登場人物は基本的に省略することなく漢訳した。規模の問題ではあるが底本から離れて別物になるほどに大幅かつ無理な改作をすることはない。

呉禱漢訳には問題小説が含まれる。問題小説とは内容が複雑厚重であることをいう。読者が読んだ後に深く考え込むほどの作品だ。

たとえばエッジワース原作、尾崎紅葉訳『俠黒児』(1893)である。紅葉は“THE

GRATEFUL NEGRO 感謝する黒人”を翻訳した。紅葉日訳を呉禱が忠実に漢訳して「俠黒奴」(1906)だ。恩義と友情の板挟みになった黒人奴隷を主人公とする。エッジワースはジャマイカの奴隷制度を背景に設定し普遍的な命題である恩義と友情の二者択一を主人公に迫った。呉禱漢訳から改良戯劇の天寶宮人編串「義俠記」(1907-08)が生まれた。小説から戯曲へと拡散するほどの驚愕度があった作品だということができる。エッジワースから紅葉(忠実な呉禱漢訳)を経て改良戯劇になる。紅葉が部分的に書き換え、戯曲も改変して結果として原作とは別作品になった。その経過がおもしろい。

原作不明、長田忠一+尾崎徳太郎訳『寒牡丹』(1901)を呉禱漢訳は日訳題名そのままの『寒牡丹』(1906)だ。ロシア貴族が一般女性に性的暴行をはたらいた。ロシア皇帝の裁定で加害者と被害者が結婚させられる。そのうえで男性はシベリアに流刑となった。伯爵邸に入ったその女性は堅実に財産を管理して地域の慈善医療にも心を配る。最終的に相手の愛情を獲得する。加害者と被害者が結びつくという小説内容が十分に意想外かつ強烈である。ロシアの自立する女性が性的暴力に負けずに階級を越えた愛情をつかむ。女性の強靭さを見せつける。重厚にして通俗的な恋愛小説だ。呉禱による作品の選択がよい。

呉禱漢訳『寒牡丹』(1906)の底本はガボリオ原作、黒岩涙香訳『有罪無罪』(1889)である。偵探小説という角書がつく。証拠というがそのまま信用していいのかと問題提起する。十分に問題小説だ。確実な証拠が追及される裁判小説の要素を備える。弁護士が犯人とされた主人公の無実を証明するために手をつくす過程が刺激的だ。裁判場面が登場するのも清末の当時としては珍しいだろう。少し残念なのは底本にある暗号使用部分を呉禱が省略したことだ。漢訳していれば暗号がでてくる初期の翻訳となっただろうと惜しむ。

前出レールモントフ作、嵯峨の家主主人訳「当代の露西亜人」(1904)がある。ロシア軍士官と異民族の娘ペーラをめぐる物語だ。呉禱は題名を『銀鈕碑』(1907)に変えた。呉禱が題名を変更したのは作品の結末を少し書き換えたことが原因である。そうすることの方が小説としてより印象的になると考えた。そういう時代の漢訳だ。冷酷なロシア人とイスラム教徒の少女という非凡な題材が珍しい。

前出日訳の「黒衣僧」(1904)を漢訳して『黒衣教士』(1907)だ。黒衣僧と会話する精神錯乱の研究者という内容である。狂人を主人公にする小説が清末に出現するなど誰が想像できただろう。心理小説としても無視はできない。

ゴーリキー作、長谷川二葉亭訳「猶太人の浮世」(1905)の漢訳が「憂患余生」(1907)になった。ロシアにおけるユダヤ人問題というのも稀有な主題である。

以上のロシア小説の日訳はいずれも雑誌『太陽』に掲載された。それが呉禱漢訳によって清末の1907年に登場している。1919年の五四よりもかなり先行することにご留意いただきたい。

原作にない部分を結末に加えた作品はもうひとつある。ズーダーマン著、登張竹風訳『賣国奴』(1904)と同じ題名で漢訳「賣国奴」(雑誌掲載は推定1905)だ。内容そのものが衝撃性に富む。賣国奴を父に持った息子の苦悩と召使いの女性との純愛を物語る。これほど濃密な作品が清末にいち早く出現しているのは驚きでもある。ただ呉禱は戦闘場所の地理的位置を誤解する。誤読はしかたがない。また最後部分に底本には存在しない後日譚を創作して加筆した。呉禱にしてみればそうすることが必要だった。原作を知っているから余計だと思う。そこを批判するならば魯迅、周作人の漢訳も同じ例があるから同様に指弾すべきだ。「賣国奴」のばあいはそれらの部分的不具合がある。しかし作品そのものの有する豊潤さが漢訳の欠陥を

上回る。

自立する女性が主人公、あるいは登場する作品をほかにも漢訳している。大沢天仙著、山陰金為+錢塘吳禱合訳「新魔術」(1906)と広津柳浪著、錢塘吳禱訳「美人煙草」(1906)だ。両作品ともに日本原作である。女性が働いて恋人の男性を経済的に援助し大学を卒業させる。これも小説題材として新しい。

『侠女郎』(1913)では日本の若い女性が海外で活躍する。探検小説の要素がある。押川春浪「女侠姫」(1912)を原作とする。

葛維士(ガーヴィス)著、中内蝶二訳、錢塘吳禱重演「理想美人」(雑誌掲載は推定1906)はいわゆる不治の病にかかった女性が題材となっている。それだけで驚愕度が強くかつ貴重な小説といえる。

ドーデ「ベルリン包囲」を押川春浪が翻訳して「老愛国者」(1912)だ。吳禱が漢訳して「拊髀記」(1913)になった。老愛国者が主人公だがそれを精神的に支える孫娘の存在も忘れることはできない。

作品の主人公が女性である作品は5種ある。主人公ではないが重要な役割を担っている女性の作品は7種にのぼる。恋愛小説があるから女性が登場するのは自然だ。しかし22作品のほぼ半数以上で女性が活躍するのは注目してもいい。

吳禱による独特な固有名詞漢訳法を説明する。

明治時代の日訳では固有名詞を日本化する作品がある。『賣国奴』(1905)ならば主人公のボレスラフ、フォン、シユランデン(Boleslav von Schranden)を例にする。竹風は日本風に砂田保正(すなだ やすまき)に置き換えた。シユランデンから連想して砂田となる。別の漢訳者がいたとしてそういうばあいは砂田保正を使用するのではないか。あるいはまったく関係なく中国化する。ところが吳禱はそうではない。日本語読みに漢語音を当てる。砂田は「史拿[那]特 shinate」に、保正は「やす」から「約西 yuexi」に漢訳した。吳禱以外にそ

ういう例はないように思う。

もう少し実例をあげる。

『棠花怨』(1908。前身は「博浪椎」1907)の底本は黒岩涙香訳『梅花郎』(1890)だ。吳禱はその底本作者を「(法)雷科」と表記する。雷科は涙香を指す。涙香(るみかう)の「るみ」に「雷 lei」を、「かう」に「科 ke」を当てた。フランス人にしたのはご愛嬌だ。

『梅花郎』の主人公梅花郎(ばいくわらう)は吳禱の漢訳では「裴克羅 peikeluo」である。

『車中毒針』(1905)の画家 Paul Frenense は英人ブラックによって加納元吉になった。吳禱は加納(かのう)を音読みして漢字の「葛撓 genao」を当てる。

『寒桃記』(1906)の主人公はガボリオ原作と英訳は Jacques de Bois Moran ボイスコランだ。涙香は「姓ホースカーラン、名ヂヤケヤス」とする。そこからの連想で日本名は星川武保だ。涙香独自の表記法といえる。吳禱は星川(ホースカーラン)に「賀士倫 heshilun」を配置して近似だ。

以上のとおり。これらの作品はいずれも日本語底本のままではない。日本風登場人物名を漢語音で写したことで外国小説風になった。いってみれば日本風を排除してもとの原作にもどったのだ。日本化しない日訳は違う。「パーラン」とあれば漢訳してそのまま「巴蘭」だ。あるいは日本語原作の作品の登場人物は漢訳ではそのままを使用しているから区別がつく。

吳禱漢訳小説には負の側面も一部だがたしかに存在する。情景描写について吳禱の漢訳は加筆して飾る傾向があるのは許容範囲内である。誤訳は翻訳につきものだ。また作品によっては最後部分を少し書き換え、あるいは加筆した。望ましいことではなかった。しかしそれが許された時代の漢訳である。

総体的にいて吳禱漢訳小説の特徴ひとつは問題小説を含む多彩な内容であることだ。それを選択した吳禱の見識は特に優れている。評価

されるべきだと思う。また女性が活躍するものも多数を占める。特色のひとつだ。さらに白話を使用して日本語訳に忠実であろうとしている。これが基本姿勢である。力づくで変更して別作

品に仕立て上げたものはない。1919年より以前の実例だから強調していい。以上により筆者は呉構漢訳小説を高く評価する。 罫

呉構漢訳の国別集計

	1905	1906	1907	1908	1909	1910	1911	1912	1913	合計
イギリス		3	2							5
フランス	1	2	1						1	5
日本		2	1						2	5
ポーランド		1								1
ロシア			3							3
ドイツ	1									1
アメリカ		1				1				2
合計	2	9	7			1			3	22

呉構漢訳小説の底本と原作一覧 (創作は含まない。簡略化して示す。詳細は樽目録を参照のこと)

イギリス 1906年3種/1907年2種

- 「斥候美談(軍事小説)」フランス軍人の狐狩り 短篇 白話
科楠岱爾著 (日)高須梅溪訳意 中国銭塘呉構重演 『繡像小説』72期 刊年不記。推定丙午1906/コナン・ドイル作、高須梅溪訳意「(軍事小説)大佐の罪(斥候の滑稽談)」『太陽』1904。ARTHUR CONAN DOYLE“THE CRIME OF THE BRIGADIER 准将の犯罪”(“THE STRAND MAGAZINE”1900)
- 「俠黒奴(短篇小説)」恩義と友情 中篇 白話
(日)尾崎紅葉著 銭塘呉構訳演 『東方雑誌』1906/(渡辺浩司)紅葉山人(尾崎紅葉)『少年文学第19編 俠黒児』博文館1893。MARIA EDGEWORTH“THE GRATEFUL NEGRO 感謝する黒人”(“POPULAR TALES”1804)
- 「理想美人」いわゆる不治の病 短篇 白話
葛維士著 (日)文学士中内蝶二訳 銭塘呉構重演 『繡像小説』71-72期 刊年不記。推定丙午1906/ガー・井”ス作、中内蝶二訳「理想の美人」『太陽』1904。CHARLES GARVICE 著。原作不明。
- 『薄命花(科学小説)』催眠術 短篇 白話
(日)柳川春葉著 呉構訳 商務印書館1907/柳川春葉「虚無党の女」『太陽』1904。WILLIAM TUFNELL LE QUEUX,“THE SOUL OF PRINCESS TCHIKHATZOFF”(“STOLEN SOULS”1895所収)
- 「博浪椎(裁判小説)」恋愛の四角関係 長篇 文言 原作不明 GEORGE MANVILLE FENN とか
(法)雷科著 天涯芳草(呉構)訳 『競立社小説月報』1907→『棠花怨(裁判小説)』(法)雷科著 中国天涯芳草館主海陽呉構宣中訳 中国図書公司1908/黒岩涙香訳述『梅花郎』明進堂1890

フランス 1905年1種/1906年2種/1907年1種/1913年1種

- 『車中毒針(偵探小説)』殺人事件 長篇 白話
(英)勃拉錫克著 呉構訳 商務印書館1905/英人(石井)ブラック(HENRY JAMES BLACK 快樂亭ブラック)演述、今村次郎速記『(探偵小説)車中の毒針』三友社1891。底本のアメリカ版は F. DU BOISGOBEY 原著、

S. LEE 英訳“THE MYSTERY OF AN OMNIBUS.”1882。イギリス版あり。フランス語原作：FORTUNÉ DU BOISGOBEY,“LE CRIME DE L'OMNIBUS.”1881

- 『寒桃記(偵探小説)』四角関係の殺人事件 長篇 白話
(日) 黒岩涙香原著 錢塘吳構訳述 中国商務印書館1906/黒岩涙香『有罪無罪』魁真樓書店1889.11.5。英訳“WITHIN AN INCH OF HIS LIFE”1874。原作 ÉMILE GABORIAU“LA CORDE AU COU”1873
- 『寒牡丹(哀情小説)』自立する女性 階級を越えた愛情 長篇 白話 原作不明
(日) 尾崎紅葉著 錢塘吳構訳 中国商務印書館1906/長田忠一+尾崎徳太郎『寒牡丹』春陽堂1901
- 『五里霧』妻とその愛人に対する復讐物語 短篇 白話
(日) 上村左川著 杭県吳構訳 商務印書館1907/モウパッサン作、上村左川訳「五里霧中」『太陽』1902。GUY DE MAUPASSANT 著、ROBERT CHARLES STORRS WHITLING 英訳“MONSIEUR PARENT”(THE AFTER-DINNER SERIES. GUY DE MAUPASSANT'S SHORT STORIES. 3RD SERIES,[1896])。原作“MONSIEUR PARENT”1885
- 「拊髀記(歴史小説)」老愛国者と孫娘 短篇 白話
(日) 押川春浪著 中華吳構宣中訳 『小説月報』1913/[渡辺105]押川春浪「巴黎奇談 老愛国者」『英雄小説 大復讐』本郷書院1912。GEORGE BURNHAM IVES 英訳“THE SIEGE OF BERLIN (“ALPHONSE DAUDET'S SHORT STORIES”1909)。原作 ALPHONSE DAUDET“LE SIÈGE DE BERLIN”1873

日本 1906年2種/1907年1種/1913年2種

- 「美人煙草(立志小説)」自立する女性 短篇 白話
(日) 広津柳浪著 錢塘吳構訳 『東方雜誌』1906/(広津)柳浪「美人萇」『太陽』1905
- 「新魔術」催眠術 働く女性 中篇 白話
(日) 大沢天仙著 山陰金為、錢塘吳構(構)合訳 『新世界小説社報』1906/大沢天仙(興国)『催眠術』文禄堂書店1903
- 『虚無党真相』虚無党物語 (梁艷論文による)漢訳未見 長篇 白話
(徳) 摩哈孫著 芳草館主人(吳構)訳 広智書局1907/[梁艷144]塚原洪柿園著『虚無党』国民書院1904、『続虚無党』国民書院1906
- 「侠女郎(冒険小説)」活躍する若い女性 短篇 白話
(日) 押川春浪著 中華吳構宣中訳 『小説月報』1913/[渡辺105]押川春浪「冒険小説 女侠姫」『英雄小説 大復讐』本郷書院1912所収
- 「大復讐(英雄小説)」青年の復讐 短篇 白話
(日) 押川春浪著 中華吳構宣中訳 『小説月報』1913/[渡辺105]押川春浪「英雄小説 大復讐」『英雄小説 大復讐』本郷書院1912所収

ポーランド 1906年1種

- 「灯台卒」老灯台守の失敗 短篇 白話
星科伊梯撰 (日) 国[田]山花袋訳 錢塘吳構重演 『繡像小説』刊年不記。推定丙午1906/シエンキウイツチ作、田山花袋訳「灯台守」『太陽』1902。HENRYK SIENKIEWICZ“LATERNIK”1893

ロシア 1907年3種

- 『黒衣教士』黒衣僧と会話する精神錯乱の研究者 恋愛悲劇 短篇 白話
(俄) 溪崖霍夫(契诃夫)著 (日) 薄田斬雲訳 錢塘吳構重訳 商務印書館1907/露国チエコーフ作、薄田斬雲

訳「黒衣僧」『太陽』1904。英訳本はANTON TCHEKHOFF 著、R. E. C. LONG 訳、*THE BLACK MONK AND OTHER STORIES*, 1903。CHEKHOV (Чехов) 著「Черный монах 黒衣の僧」1894。

- 「銀鈕碑(言情小説)」ロシア軍士官と異民族の娘 中篇 白話
(俄) 萊門忒甫著 吳禱訳 商務印書館1907/レルモントフ作、嵯峨の家主(矢崎鎮二郎)訳「当代の露西亜人」『太陽』1904。LERMONTOV (Лермонтов) 著「Герой нашего времени 現代の英雄」(「Бала べーラ」部分) 1840
- 「憂患余生」ロシア人とユダヤ人 短篇 白話
(俄) 戈厲機著 (日) 長谷川二葉亭訳 錢塘吳禱重演 『東方雜誌』1907/ゴーリキー作、長谷川二葉亭訳「猶太人の浮世」『太陽』1905。GORKII (Максим Горький) 著「КАИН И АРТЁМ カインとアルチョム」1899

ドイツ 1905年1種

- 「賣国奴」賣国奴を父に持った息子の苦悩と召使い女性との純愛 長篇 白話
(徳) 蘇徳蒙原著 (登張竹風原訳 吳禱重訳) 『繡像小説』刊年不記。推定乙巳1905/(ズーダーマン著) 登張竹風訳『賣国奴』金港堂書籍株式会社1904。HERMANN SUDERMANN“DER KATZENSTEG”1889

アメリカ 1906年1種/1910年1種

- 「山家奇遇」妻の死を認めることができない男性 短篇 白話
(美) 馬克多槐音著 (日) 抱一庵主人訳 錢塘吳禱重演 『繡像小説』刊年不記。推定丙午1906/マーク、トワイニング著、(原) 抱一庵主人訳「山家の恋」『太陽』1903。MARK TWAIN“THE CALIFORNIAN'S TALE”1893
- 「二十六点鐘之大飛行(冒険短篇小説)」アドバルーン(気球)の冒険 日訳不明 短篇 文言
(美) 漢倫孫記 天涯芳草館主宣中(吳禱)訳 『申報』1910/原作は EDGAR BEECHER BRONSON“AN AERIAL BIVOUAC (TWENTY-SIX HOURS IN A BALLOON)” (“THE AMERICAN MAGAZINE”1907)

【参考文献】網羅していない。

阿 英「翻訳史話」1938『小説四談』上海古籍出版社1981.12

中村忠行「吳禱訳『売国奴』その他」『中国文芸研究会会報』第24号 1980.7.28

郭延礼には以下の文章がある。

「六 吳禱の俄羅斯文学翻譯」(「第5章 外国文学的紹介及其流播」『近代西学与中国文学』南昌・百花洲文藝出版社2000.4)。

「俄羅斯文学的早期訳者吳禱」(『自西徂東: 先哲的文化之旅』長沙・湖南人民出版社2001.4)。

「俄羅斯文学三大名家的早期訳者吳禱」(『文学經典的翻譯与解讀——西方先哲的文化之旅』濟南・山東教育出版社2007.9。「俄羅斯文学的早期訳者吳禱」と同文)。

沢本香子「書家としての吳禱」2009初出。補遺を追加

して樽本照雄『清末翻譯小説論集(増補版)』2017.1.15電字版所収

樽本照雄「吳禱の漢訳チェーホフ」2010初出。『清末翻譯小説論集(増補版)』2017.1.15電字版所収

——「吳禱の漢訳ゴーリキー」2011初出。『清末翻譯小説論集(増補版)』2017.1.15電字版所収
そのほかの吳禱漢訳に関する論文は『清末小説五談』に収録している。

郭 長海「天涯处处有芳草 錢塘海陽是兩家」『清末小説』第34号 2011.12.1

趙 霞「二十世紀初留学生訳者特点剖析——以吳禱《小説月報》前期(1910-1920)翻譯作品為例」『中国近代文学学会小説分年会暨中国近代小説學術研討會論文集』開封・河南大学文学院2013.9

崔 琦「吳禱的翻譯活動与日本《太陽雜誌》」『清華大学学报(哲学社会科学版)』2013年増1期

第28卷)、2013

- 楊 鳳鳴「吳禱与契訶夫——從《黒衣教士》看吳訳受
到的日本影響」『東方翻譯』2013年第6期(総第
26期)2013.12
- 王 岩岩「翻譯的歴史文化影響——以吳禱、周瘦鵬
The Californian's Tale 的翻譯為例」『校園英語』
2017年第14期「翻譯研究」2017.4.5
- 鄒 波「東アジアにおける『ドラ・ソーン』の翻譯
と翻案——小説の翻譯を中心に」香港日本語研究
会『日本学刊』第21号 2018.8 電字版
- 文 娟「試論吳禱在中国近代小説翻譯史中的地位
——以商務印書館所刊單行本為研究視角」『明清小
説研究』2018年第4期(総第130期)2018.10.15
——『前『五四』時代的文化符号:商務印書館与
中国近代小説』桂林・広西師範大学出版社2021.6
- 荒井由美「吳禱についての文娟論文」『清末小説から』
第133号 2019.4.3
——「文娟論文を評した文章を評する——陳鵬安
論文について」『清末小説から』第148号2023.1.1
- 陳 鵬安「転訳中の“報恩”模式轉換——以吳禱訳《侠黒
奴》為中心」『東北亜外語研究』2019年第4期
(総第27期)2019.12.15 電字版
——「吳禱相關史料の新發現——兼与文娟《試論
吳禱在中国近代小説翻譯史中的地位——以商務印書
館所刊單行本為研究視角》商榷」『明清小説研究』
2022年第1期(総第143期)2022.1.15
- 梁 艶「關於吳禱訳《(偵探小説)虚無党真相》的
底本及其他」『清末小説から』第144号 2022.1.1

★

『清末小説から』第149号

2023.4.1

- 天寶宮人「(改良戯劇)義俠記」——吳禱『侠黒奴』
との違い …………… 沢本香子
- 劉半農「洋迷小影」——杉谷代水「(狂言)衣大
名」…………… 荒井由美
- 貢少芹漢訳『一粒鑽』の原作 …………… 沢本郁馬
- 漢訳ドーデ「ベルリン包圍」——吳禱、竊名、胡適
…………… 樽本照雄

清末小説研究会 <http://shinmatsu.main.jp>

《2014-2016年东亚近代翻译文学研究 综览》之辨正

付 建 舟

笔者孤陋寡闻，直到近日才读到窦新光发表在《中国图书评论》2017年第5期上的大作《2014-2016年东亚近代翻译文学研究综览》(以下简称《综览》)。《综览》还于2020年3月5日在《亚洲评论》公众号推出。该文评述了2014至2016年东亚近代翻译文学研究的六部著作，也提及此前的一些相关研究成果。敝著《清末民初小说版本经眼录(日语小说卷)》(中国致公出版社2015年)也在评述之列，甚为荣幸。

然而，《综览》涉及的李艳丽关于“日语小说”的“新提法”与“事实”不相符，有辨正的必要。

笔者研究清末民初小说多年，注重“文献”，通过对大量“文献”的搜集整理和阅读，不免产生一些想法，偶有“发现”，诉诸笔端。2009年，笔者率先提出“日语文学”这一概念(尽管“日语文学”一词早就出现，但不是笔者意义上的“日语文学”)，撰写了论文《清末民初日语文学的汉译与中国文学的现代转型》(以下简称《转型》)，发表于《外国文学评论》2009年第4期上。清末民初时期出版了许多新小说，其中不少作品是通过日本译介到中国的，笔者认为，研究通过“日本渠道”的汉译域外小说，不能仅仅研究汉译的“日本原创小说”(或者说“原创日本小说”)，也要同时研究通过日本(即日译本)汉译的其他国家的小说，就提出“日语文学”

这个概念。

这一概念引起了李艳丽的关注。李艳丽致力于中日文学关系研究，侧重清末民初这一时段，她把笔者的“日语文学”改造为“日语小说”，体现了她对笔者观点的认同。其实，樽本照雄先生早就关注到了，他介绍说：作为“经眼录”系列的第四本，《清末民初小説版本经眼录·日语小说卷》，收录了98个种清末民初（1898-1917）的日语小说（单行本及其他）。以配有封面和封底版权页的照片为特色。（樽本照雄著《清末小説二谈》，日本·清末小説研究会2017年，第558页。）

在笔者看来，“日语文学”不仅仅是一个命名的问题，而且是一种学术观点，一种学术思路。为此，笔者于2015年还特意出版了《清末民初小説版本经眼录（日语小说卷）》，再一次更集中更鲜明地突出这种学术观点和这种学术思路。笔者之所以使用“日语文学”一词而不使用“日语小说”一词，是因为便于把非“小说”作品也囊括进来。该文作为《清末民初小説版本经眼录（日语小说卷）》的《代前言》时为了聚焦“小说”而改用“日语小说”一词。李艳丽的论著《晚清日语小説译介研究（1898-1911）》（上海社会科学院出版社，2014）、论著（见李艳丽著：《晚清文学与明治文学关系研究：“人情”与“女性”》，上海社会科学院出版社，2019）第十一章中的“日语小说的中国译者、外国著者及译者整理”，吸收了笔者“日语文学”这一概念的内核，并成为其论著《晚清日语小説译介研究（1898-1911）》的核心概念，还成为其著的“一个亮点”。从李艳丽的相关成果来看，笔者的这种学术观点、这种学术思路被延续下来。这一核心概念，又通过李艳丽的著作为窦新光所关注并延用。《综览》注释[1]云：

窦新光：《近代初期东亚世界日语小説传播的展开路径》，“知识·小説·近代时期的文化通涉”学术会议论文集，韩国中国小説学会，首尔，2015年10月17日。统计工作还在进行当中，

因此数据今后可能会有一定幅度的变动。

《综览》文末有这样的一段话：

本文是日本学术振兴会科学研究费支援事业特别研究员奖励费资助项目“近代中日韩三国明治小説传播研究”（课题编号：15J04686）的成果。

通过这两段文字的比较，我们推测，窦新光的“项目”在先，关于“韩国中国小説学会”的与会论文在后，“项目”未使用“日语小说”，论文题目则使用了“日语小说”，根据时间关系来判断，窦新光很可能是受到李艳丽论著中“日语小说”这一核心概念的影响。果真如此，那么，影响的脉络就很清楚：笔者使用“日语文学”概念→李艳丽使用“日语小说”概念→窦新光延用“日语小说”概念，至此“日语小说”“这一新提法在学界逐渐扩散”（窦新光：《综览》中语）。

然而，《综览》的评述给人的印象并非如此。

《综览》一文介绍了李艳丽著的《晚清日语小説译介研究（1898-1911）》，声称：“‘日语小说’这一新术语的使用，是该著的一个亮点。清末民初中国从日本翻译引进的小说中，既包括日本作家创作的作品，也包括日本译者翻译的西方作品，但学界长期以来一直模糊地使用‘日本小説’一词。对此，李艳丽在该著中首次使用‘日语小说’，该词显然包含了两类作品，‘一是通过日本转译的、其他国家的小说；二是直接从日本引进的、日本作家创作的小说’，语义更加明确，是一种有建设性的新提法。”窦文紧接着介绍了付建舟的著作《清末民初小説版本经眼录（日语小说卷）》（以下简称《日语小说卷》），声称：“该著收录了作者多年来所见清末民初汉译日语小説原版的各项出版信息，信息量较大，是该领域新出现的一部具有重要参考价值的工具书性质的著作。相对于李艳丽著作注重提供在日本的‘日语小説的原样’，付建舟著作则致力于提供其在中国的‘汉译本的原样’。”“作者付

建舟在清末民初小说版本的调查整理方面已有多年的积累”，与此前他已出版的“经眼录”系列数集相比，《日语小说卷》更具专题性，在形式和内容上均有明显改进，更便于相关研究者参考和使用。”“该著为清末民初的日语小说译介研究提供了丰富的基础原始资料，是学界首次专门对清末民初日语小说汉译本基本信息作出的大面积摸底和集中呈现，具有重要的参考价值。”“该著出版于李艳丽著作5个月之后，也明确使用了‘日语小说’这一概念。……在相近时间出版的这两部著作都使用了‘日语小说’这一用语，说明这一新提法在学界逐渐扩散。”

这样的评介给人以这样的印象：“日语小说”这一学术概念由李艳丽所“原创”，她“首次使用‘日语小说’”，是“新术语的使用”者，新术语是“一种有建设性的新提法”，新术语的使用是其论著的“一个亮点”。相反，付建舟不是“原创”者，“也明确使用”，成为“承袭”者。但是，这是不对的。实际情况是，李艳丽论著的“日语文学”概念是“化用”笔者《转型》一文中的核心概念“日语文学”；她对“日语小说”界定也是“化用”笔者对“日语文学”的界定，但她没有加注，仅仅把《转型》一文列为参考文献，这是“颇有技巧”的。

李艳丽的“日语小说”是这样界定的：“一是通过日本转译的、其他国家的小说；二是直接从日本引进的、日本作家创作的小说”。

笔者的“日语文学”是这样界定的：“一是指日本作家用日语创作的文学作品，属于日本文学范畴；二是指日本翻译家用日语翻译的外国作家作品，属于日本翻译文学范畴。”

李艳丽的“化用”有三个技巧：一是改变付建舟界定的一与二的顺序，二是把“文学”改为“小说”，三是改变叙述的文字。尽管如此，其本质却没有变化，而“化用”者却变成了“原创”者，“原创”者却变成了“承袭”者。这很奇怪。这种“化用”不明确地指明出处，也是“颇有技巧”的。

其实，“日语文学”至少还有这样两种含义：

一是指日本语言文学，二是外国作家用日语创作的文学作品，例如韩国作家用日语创作的文学作品。这两种含义，都不在笔者所界定的“日语文学”含义之内，因为笔者《转型》一文的论题不涉及这两项内容，而李艳丽的“日语小说”的界定也不涉及这两种含义。也许她有与我同样的想法，也许她根本没想到。

窦新光在《综览》中敏锐地指出：“清末民初中国从日本翻译引进的小说中，既包括日本作家创作的作品，也包括日本译者翻译的西方作品，但学界长期以来一直模糊地使用‘日本小说’一词。”这正是笔者《转型》一文所关注的问题，于是就提出“日语文学”（当然主要是指“日语小说”），而不使用“日本文学”（日本小说）。不仅如此，笔者在《转型》一文中还想强调“日本渠道”，强调“转型”，也许由于受到论题的影响，“日本渠道”强调得不够。不过，笔者在《清末民初俄国小说译介路径综考（上下）》（载日本《清末小説から》2014年第115期、2015年第116期）一文中，基于“文献”，发现清末民初俄国小说之汉译，“日译本译介路径”很强势，比“英译本译介路径”还强势，处于第一位。

以上内容是笔者所作的“辨正”，不妥之处，敬请赐教。 ㊦

付建舟：浙江师范大学人文学院研究员

「説部叢書」の箱売り ——商務印書館の販売活動

樽本照雄



孔夫子旧书网に掲載された写真（一瞬姿を現わしアワのように消えた）をご覧いただきたい。商務印書館版「説部叢書」全一百種を収納する鍵付き木箱だ。蓋に「説部叢書／共百種／上海商務印書館藏版」と彫りこんである。「式」は「一」の古字。写真を見れば鍵を取っ手がわりにして手前に引いて開けたらしい。

別の写真には「説部叢書」初集本（リボン文様）の複数冊が示されていた。民国初期に出された初集本（付建舟の用語では四集系列）がその木箱に保管されていたことを示す。ただしもうひとつの可能性もある。初集に先行する元版（タンポボ文様。同じく十集系列）だ。清朝末期に刊行された。それが収まっていたとしても不思議ではない。

清末の元版一百編（種でも同じ）が完結したのを記念して一括販売したことを指している。その際、全冊を格納するために作成した木箱が最初だ。古典籍などを横置きして収めるのと同じ形式である。

「説部叢書」の各冊には薄厚があって一定しない。平装だから縦置きするには少々無理がある。古典籍あつかいだと考えればそれだけの価値を自負していたともいえる。あるいは100冊を超える大量刊行物だ。縄で括るわけにもいかない。段ボール箱も普及していない時代である。帙で包むという方法も考えられなくはない。しかし冊数が多い。複数套が必要というのでは扱いにくい。まとめて売り捌くには専用の木箱を用意の方がやりやすかったと推測する。

商務印書館が「説部叢書」を木箱に入れて販売したという事実は文献で知っている。だが実物の鮮明な色彩写真を見るのははじめてだ。

清末の元版は全十集一百編である。民初の初集本も全100編だ。「共一百種」であることに変わりがない。写真の木箱が収納したのは元版あるいは初集本である。つまり箱売りしたのは1度だけではなかった。

いきなり本題に入ってしまった。筆者の知る限り「説部叢書」を収納する専用木箱を取り上げて説明した論文はないように思う。

続けて少し説明する（過去の文章と重複するところがある）。

1 「説部叢書」の成立から

商務版「説部叢書」はいうまでもなく外国小説の翻訳シリーズだ。

元版は一集十編の全十集で合計一百編をもって構成される。初集本はそれをまとめて初集100編にした（漢数字とアラビア数字で区別する）。両者は表紙の意匠と集編数が異なる。

いくつかの問題は清末の元版から民初の初集本に変更された部分に集中して発生している。

特に奥付の刊年記述に混乱が生じているように見える。ある作品についていうと「乙巳2(1905)初版/1913.12再版/1914.4再版」(簡略化して表示)などがある。1913年再版で同時に1914年再版とするのはなぜなのか。刊年が違うにもかかわらず同じ再版を表示するのは奇妙だ。あるいは「1905.3再版/1906.4四版/1914.4再版」という作品もある。1906年に四版が出てのちの1914年が再版では矛盾する。版数が刊行の順番になっていない。理解しがたい。そう思うのが普通の感覚だろう。類似の例が複数ある。商務印書館の版本についての記述方針が不明なのだ。

しかしその不思議な記述も「説部叢書」の刊行経過を把握すれば謎は解ける。一方でそれ以後に刊行された「二集」(第二集ではない。2集と表記する。傍点筆者。以下同じ)から「第三集、第四集」(同じく第3集、第4集)にはその種の問題はない。

収録作品の入れ替えと意匠の変更、集編の番号振り直しはいつ実行されたのか。不透明な個所が現実に存在する。以前にも述べたが版元の商務印書館がそれらについて今まで説明したことはない。ということで筆者が説明している*1。

できるだけ実物を観察し周囲の状況を勘案した。「説部叢書」の成立と変遷は大要次のとおり。木箱の出現と関係するから確認しておく(必要個所に「○箱売り」と記入する)。

1903年 表紙に「説部叢書」と明示する元版が出現する(作品によっては「説部叢書」が成立する以前に刊行されたものがある。先元版と称する)。第一集十編から第十集十編まで数年をかけて出版が続けられた。

1905年 表紙をタンポポ文様に統一し叢書としての一体感を演出した。

1908年 旧暦五、六月 『佳人奇遇』『経国美談』の2作品を『天際落花』『劇場奇案』に入れ替えて改組する。元版十集全一百編が完結した。○箱売

り開始。1909年、1911年(写真あり)、1912年も継続。

1913年 新暦5-12月 初集と改称し表紙をリボン文様へと一新する。統一番号に振り直した。初集第1編から第100編までの全100編である。○箱売り未確認

1914年 4月 初集100編全部を一括して重版した。以前の版数とは無関係に奥付表示は一律に「再版」と記述する。商務印書館は金港堂との合併を解消した(1914.1.6)。それを記念する再版だ。ただし宣伝文句にはしていない。○箱売り未確認。1915年○箱売り継続。1916年、1920年も継続。

1915年 2集100編完結。○箱売り継続

1920年 第3集100編完結。○箱売り継続

上の変遷概要を見れば箱売りは1908年に始まって1920年までも続いている。長期間にわたる販売方法だった。後で詳しく説明する。

2 製本の変化

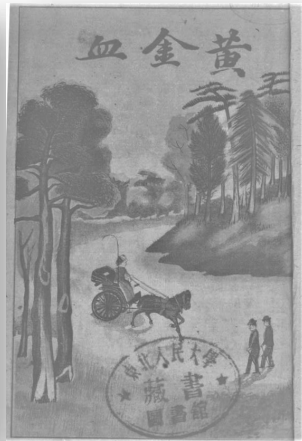
「説部叢書」の製本方法は元版でも異なるものがある。初期のものは表紙でくるんで丁寧に製本する。『夢遊二十一世紀』元版の第一集第三編の表紙と扉を示す。糸綴じで見返しが扉になっているのが見える。表紙の意匠はタンポポ文様になる前の元版だ。



孔夫子旧书网

しかし後には表紙と奥付を別に印刷して貼りつけることにした。貼るだけだから変更は自在だ。また針金綴じになっているばあいもある。

たとえば元版の第一集第十編『黄金血』(1904)の表紙は絵図で扉がついている。しかし初集第10編(1914)は表紙を貼り替えてなじみのリボン文様だ。



元版の扉と表紙



初集本表紙(孔夫子旧书网より)

元版とその重版の初集本は本文についていえば基本的に同じだと考えていい。表紙と奥付だけが別物だ。「林訳小説叢書」も同様に表紙奥付が異なるにすぎない。

3 「説部叢書」の箱売り

「説部叢書」を最初にまとめて箱売りしたのは1908年である。元版全一百編が完結したのを契機とする。上に掲げた写真の木箱(年代不明)が該当するかもしれない。ここに注釈を加

える。後述するように1920年頃まで箱売りは続いた。その期間、蓋の意匠が同一であったわけではない。少なくとも2種類はあった。この写真の木箱はそのなかのひとつだと考える。

あらためて説明する。

商務印書館は「説部叢書」をどのように売り出したのか。商務印書館を取り仕切っていた夏瑞芳は新聞広告の有効性を理解していた。自社刊行物の販売を促進するために新聞広告を大量に打ったのも方法のひとつだ。

新聞広告に見られる「説部叢書」関係の記事を主にたどって述べる。先行論文に収録された資料から抽出する。

参考にした論文とその略号は次のとおり。また手元から少しの文献を追加する。

[文文] 闕文文『晚清報刊上の翻譯小説』濟南・齊魯書社2013.5

[編年④] 陳大康『中国近代小説編年史』北京・人民出版社2014.1

[付晚上] 付建舟『晚清民營書局發行書目』上冊 哈爾濱・黑龍江教育出版社2016.12

[民小史] 黄 曼『民初小説編年史(1912-1914)』武昌・武漢大学出版社2021.5

[文娟21] 文 娟『前『五四』時代的文化符号: 商務印書館与中国近代小説』桂林・広西師範大学出版社2021.6

木箱が最初に出現する1908年の広告から見ていく。文章内容が似ていれば掲載月日の早い記事より孫引きする(原文に記号は使われていないはずだ。しかしそのままを使用。広告文の「木箱」は目立つようにゴチック体で示す。以下同じ)。それ以外の文献は内容を省略する。全文の翻訳はしない。注目するのは木箱の有無、冊数、価格などである。

[編年④1577] 『中外日報』光緒三十四年七月二十日(1908.8.16)「商務印書館説部叢書全部出售」「本館自癸卯年創行説部叢書

至今、五、六年間成書十集。(中略)為書一百種、計一百二十八冊、外加総目提要一冊、裝一木箱、極為精緻。全部定價二十八元]

[文文252]『時報』光緒三十四年七月廿七日(1908.8.23)。注:「為書三百種、計一百八十八冊」と誤る。

[文娟21-334]『申報』光緒三十四年七月二十九日(1908.8.25)。注:旧曆は補った。「為書一百種、計一百八十八冊」と誤る。原文がそうになっているらしい。

ここにある「癸卯」は1903年だ。「説部叢書」刊行開始の年を断言した。「五、六年間」だから1908年あるいは1909年になる。しかし新聞の日付が1908年だ。おおよその時間を示しただけだとわかる(『上海指南』1909にも「五六年」と記述する。定型文だ)。「十集」は元版を指す。「総目提要」1冊を附録に付け、木箱に収納して定価が28元だと告知した。全一百編で冊数は全128冊と記す。ところが後の記事では違う冊数を提示している(後述)。この28元は商務印書館にしてみれば大幅割引した価格だ。

次の広告は支払い方法を説明する。

[編年④1597]『神州日報』光緒三十四年八月十八日(1908.9.13)「購閱説部叢書按月繳銀辦法」「本書十集、訂一百三十本、原定價四十元零二角五分、又加木箱一具、價一元。凡現銀購買全部者、減價二十八元、并附贈袖珍小説全部、計二十冊。今為閱諸君便利起見、另定按月繳銀辦法、分為甲、乙兩種。甲:全部二十九元。先交定洋五元、以後按月交四元、至六個月為止;乙:全部三十一元、先交定洋五元、以後按月交二元、至十三個月為止。(後略)」

[文文253]『時報』光緒三十四年八月十九日(1908.9.14)「又加一木箱具價一元」とある。

[文娟21-334]『申報』光緒三十四年八月二十日(1908.9.15)「又加木箱一具、價一元」とする。

ここでは十集全130冊と述べている。冊数が異なっていることに注目されたい。もとの定価では合計40元2角5分、さらに木箱1元の追加が必要とされる。それを一括で支払うと28元となり、おまけに袖珍小説20冊が付いてくる。分割払い、すなわち月賦払いの方法には甲乙の2種がある。甲は総額29元、先に5元を支払い、あとは月4元の6ヵ月払い。乙は総額31元、先に5元を支払いし、あとは2元の13ヵ月払い。

分割払いにも細かい設定をした。購買者はそこから選択することができる。木箱はもとから1元の値らしい。一括払いも月賦払いでも木箱が無料で付いてくるという説明である。

1909年にも元版28元で箱売りは続いた。

[編年④1672]『神州日報』光緒三十四年十二月二十一日(1909.1.12)「《説部叢書》百種、計一百二十八冊、合裝一木箱、定價二十八元(後略)」

[文娟21-336]『申報』宣統元年正月初五日(1909.1.26)

[文娟21-338]『申報』宣統元年正月初七日(1909.1.28)

[編年④1747]『神州日報』宣統元年三月二十日(1909.5.9)「(前略)説部叢書十集一百種、連木箱一只、每部二十八元。(後略)」

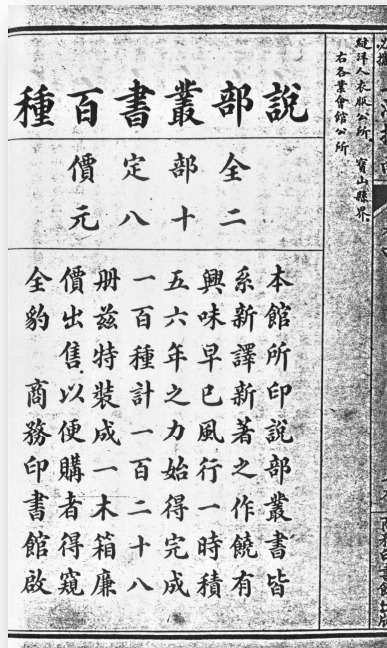
[文娟21-339]『時報』宣統元年三月二十日(1909.5.9)

『上海指南』(宣統元年(1909)五月初版/七月再版)広告に木箱の記述がある。「説部叢書百種/全部定價/二十八元/本館所印説部叢書皆系新訳新著之作。饒有興味早已風行一時。積五六年之力始得完成一百種計一百二十八冊。

茲特裝成一木箱廉価出售以便購者得窺全貌」
(句点筆者)

128冊、28元は一貫している。
次の文献は上文とほぼ同じ。

[付晚上196]『商務印書館書目提要』1909.
九改定7版。「説部叢書百種、定価二十八元
／本館所印「説部叢書」、皆系新訳、新著
之作、饒有興味、早已風行一時、積五六年
之力始得完成一百種、計一百三十一冊、茲
特裝成一木箱以便購者、得窺全貌、茲將書
目列後」



『上海指南』1909年広告

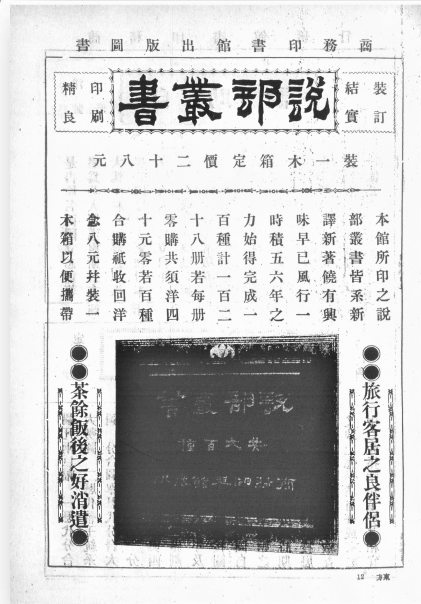
木箱を用意したことと定価が28元は変わらない。ただしここでも冊数が128冊と131冊で異なる。

『東方雑誌』第8巻第1号(1911.3.25)の広告も木箱を出す。同誌第8巻第9号(1911.11.15)には木箱の白黒写真を添えていたと記憶する。資料が手元にないため国立国会図書館に調査を依頼した。掲載すると回答をもらう。ここに示すのはその木箱広告だ。

その広告文は次のとおり(句点筆者)。

「(装訂結実)説部叢書(印刷精良)／装一木箱定価二十八元／本館所印之説部叢書皆系新訳新著之作。饒有興味早已風行一時。積五六年之力始得完成一百種計一百二十八冊。若每冊零購共須洋四十元零。若百種合購祇收回洋念八元。并装一木箱以便携帶／(旅行客居之良伴侶)(茶余飯後之好消遣)」である。

『上海指南』のものとはほぼ同文だ。128冊、28元も共通する。木箱に収納して携帯に便利だという。しかしいつも持ち運ぶものではないだろう。



『東方雑誌』広告 国立国会図書館所蔵

木箱ならば移動が簡単だという意味に理解しておく。

木箱の写真が不鮮明なのは残念だがかすかに見ることができる。

冒頭に掲げた色彩写真と見比べる。鍵口まわりの意匠が異なる。彫り文字の大きさ、配置も一致しない。なによりも「説部」「式」という文字の形が別物だ。手彫りだから完全に同じにはならない。しかし下部にあるはずの「上海」がない。ただの「商務印書館蔵版」となっているのは大きな違いだ。また「上海」がない分、字体も色彩写真のものより大きい。同時期に作

って「上海」があるのとなないものが共存するのは不可解だ。そこから見て木箱は複数種が製作されたという結論になる。

『東方雑誌』掲載の木箱と色彩写真の木箱とではどちらが先なのか。時間の特定はむづかしい。手掛かりは色彩写真に初集本が収録されていたことだ。それを信頼すれば1914年頃だ。

『東方雑誌』掲載の木箱が先になる。色彩写真の木箱は後の製作だろう。あくまでも推測にすぎない。単に2種類があるというだけでもよい。

中華民国になった1912年にも箱売りが維持されている。以下のとおり。

[文娟21-353]『小説月報』第3年第4期1912.7「商務印書館出版図書」「<説部叢書>装訂結実、印刷精良、装一木箱定価二十八元。旅行客居之良伴侶、茶余飯後之好消遣。本館所印之説部叢書皆系新訳新著、饒有興味、早已風行一時、積五六年之力、始得完成一百種、計一百二十八冊。若每冊零購共須洋四十元零、若百種合購、只收回洋八元并装一木箱以便携帶」

[民小史96] 上文とほぼ同じだが「旅行客居之良伴侶、茶余飯後之好消遣」の位置が一致しない。

ここでも合計28元という価格設定だ。冊数は128冊。木箱に収納して携帯に便利だというのも1911年の『東方雑誌』と共通している。

以上は元版(タンポポ文様)一百種の箱売りである。リボン文様に変更した1913年の初集本も箱売りしたかは不明だ。これについての広告を確認できていない。

1914年に初集本全100編をまとめて再版した。これが次の段階である。

その出版予告広告は1913年12月25日掲載であって日付がまことに微妙だ。商務印書館と金港堂両社の合弁解消に向けた協議がほぼ終結した時期に当たっている。合弁解約成立を見越して

箱売りを予告していると理解する。

[文娟21-357]『申報』1913.12.25「商務印書館<説部叢書>」「本館出版小説情節新奇、趣味濃深、極承閱者歡迎、惟以陸續發行、未得窺全豹為憾、本館特重行匯印、發售定価二十元、預約十元、不及原価四分之一。中有林琴南先生手筆十一種、尤為本叢書之特色。三年陽曆三月出版、決不有誤、另刊目錄樣本、函索即行寄贈、預約二月底截至。愛読小説者幸勿失此機會」

[文娟21-357]『小説月報』第4巻第8号1913.12.25「商務印書館出版説部叢書」

「本館出版小説一百三十冊、一万六千余頁、七百数十万言、零售四十余元、預約減收十元、陽曆二月截止。本館出版小説情節新奇、趣味濃郁、極承閱者歡迎、惟以陸續發行、未得窺全豹為憾。茲特重行彙(匯)印、發售定価二十元、預約僅售十元、不及原価四分之一。中有林琴南先生手筆二十一種、尤為特色。三年陽曆三月出版、另刊目錄、樣本函索即行寄贈(後略)」

[民小史300] は上記の『小説月報』広告について「一百零三十冊」「三年陽曆三月出版、決不有誤、另刊目錄樣本、函索即行寄贈」とする。傍点部分が両者でわずかに異なる。

冊数は130冊だ。民国3(1914)年3月に必ず出版するという予告広告である。予約の期限が2月となっている(後に延期された)。重版してしかも定価がもとの28元から20元に値下げになった。予約をすれば10元というまさに破格の低価格とすることができる。この広告には木箱が出てこない。

収録する林訳小説の種類数が『申報』は「十一種」だ。『小説月報』では「二十一種」として数字が違う。前者の「十一種」が本当にそう記述されているならば誤植だろう。なぜなら

「説部叢書」にある林訳小説は21種が正確だからだ。

4 商務印書館と金港堂の合併をめぐる

1913年12月25日の広告が微妙だと書いた。くり返せば合併問題が関係しているからだ。すなわち広告を出した直後の1914年1月6日に商務印書館は金港堂との合併を取りやめる。

上の「説部叢書」重版予告は合併解消を視野に入れた計画的なものだと思われる。合併解消を記念して刊行するという意思表示である。それ以外に考えようがない。ただし合併解約記念という真の理由は伏せた。だいいち1913年12月の段階ではまだ合併期間内だ。表立って合併解約記念と銘打つわけにもいかないだろう。その後も類似の表記は見えない。実施はあくまでも商務印書館による内向きの行事であった。

購入予約期限は1914年2月末だ。『申報』(1914.2.17)に締め切り迫るといふ広告がある([文娟21-357])。同日『時報』の広告も同文だ([民小史331])。

1914年3月1日の『申報』には「緊要広告」が掲載される。「説部叢書」の予約期限を10日ほど延期する。予約ならば10元、それを過ぎれば20円で販売すると告げる([文娟21-358][民小史336])。すなわち3月10日が締め切り日になった。締め切り日までを数える広告が続く。

新しい展開は1914年4月6日の『時報』の広告に出現する。

[民小史351]『時報』1914.4.6「説部叢書再版広告」：「説部叢書業于三月十号訂出，因遠近諸君惠臨上海總館及各省分館購預約券者紛紛不絶，逾于初版預印之数，以致不敷分配，良用歉疚，現已重行付印，約陽曆五月必可出書，屆時再登登報布告，請諸君凭券取，特書此声明」

この声明は読んでみればおかしい。3月10日に受注が終わっている。予約が多すぎて予定していた印刷数を超えてしまったという。予約締め切りから1ヵ月近く経過しているのにその対応ができないという奇異な釈明だ。さらに以前の広告では刊行の約束は3月だった。ところが4月6日時点で出版できていない。そこを「再版広告」では言い訳をする。現在すでに重印させているから5月には必ず出版する、その際には新聞で知らせる、と明言した。刊行を3月から5月に変更したのだった。つまり実質上の出版延期声明である。初集本の1914年再版は十分に準備をしていたはずだ。ところが予想を上まわる購入予約が入ったらしい。ただし予約の詳細な数字は明らかにされたことがない。

「説部叢書」初集の再版本が出版されたら告知すると保証した。ところが該当する新聞広告が見受けられない。見落としていることもありうる。

事実を把握することが重要だ。初集再版本の奥付に記載されている「中華民國三(1914)年四月再版」が決め手である。商務印書館の新聞広告にある5月刊行告知はそのとおりに実行されたかもしれない。しかし奥付は1914年4月にした可能性も残る。刊年記載と実際の発行時期に関する詳細は不明のままだ。

「説部叢書」初集再版本販売の広告は見えない。だから木箱についても不明だ。そのかわりに「林訳小説叢書」が出てくる。

『小説月報』第5巻第3号1914.6.25に「林訳小説叢書」50種を特価10元、加えて図書券2元を贈呈、8月末までという広告がある([文娟21-360]「装成一箱」「如要装箱，加価一元」、[民小史394])。ほぼ同じ内容で1914年7月19日の『申報』広告がある。「林訳小説叢書」50種原価36元のところを16円で販売する(8月までに購入するなら10元で加えて図書券2元を贈呈)とくり返している([文娟21-360]。[文娟21-361]「如要装箱，加価一元」)。こちらも廉

価販売だ。『小説月報』第5巻第5号1914. 8. 25の広告にも「装成一箱」と書く(〔民小史419])。50種97冊を数えるからこちらにも箱を用意したとわかる。

ただし研究者によってそれが木箱だとは認定していない。鄒振環は「装一紙匣」と書いて紙箱にしている^{*2}。補足して書く。「林訳小説叢書」の「装成一箱」について上記のように「如要装箱, 加価一元」と書いてある。1元は「説部叢書」の木箱の値段だ。「林訳小説叢書」についても木箱を用意したと考えるのがよい。

廉価購入期限は9月24日まで延期された(〔民小史425〕『神州日報』1914. 9. 8)。

それに先立ち『申報』1914. 1. 10の広告「商務印書館股東特別会」がある。これは商務印書館と金港堂の合弁解消を株主総会で事後承認する予定であることを知らせる。秘密保持のために理事会で先に決定し株主総会の承認は後回しにしたのだった。

合弁解約が成立すると商務印書館は積極的に継続して広報した。ひとつの例として『東方雑誌』第10巻第9号1914. 3. 1の広告で「完全華商」と大いに宣伝したことを挙げる。類似の広告宣伝は多くみられる。

『学生雑誌』第1巻第1号1914. 7. 20に「完全華商股份商務印書館」の広告が出現する。「従前日本人所附股分三十七万八千一百元於本年一月盡数收回」と説明している。日本人が商務印書館の株を所有していた事実を認めそれらをすべて回収したと報告するものだ。

さらに『小説月報』第6巻第5号1915. 5. 25にも「完全華商商務印書館」の広告がある(〔文娟21-364])。わざわざ「完全華商」と宣伝したのは理由が存在する。

上に述べたように1914年に商務印書館と金港堂は合弁会社ではなくなっている。ゆえに「完全に中華の会社」だと強調した。間違っていない。

それよりも奇怪なことがある。約10年を遡る

1903年に両社は合弁した。その際に商務印書館は合弁について公表しなかった。おかしいではないか。

商務印書館と金港堂の合弁成立時に立ち戻る。商務印書館は合弁の事実を隠そうとしたとしかいいようがない。どのように説明したか。金港堂の刊行物を扱う清国代理店になったと告知しただけだ(『申報』1903. 12. 30、『上海週報』1904. 1. 1。〔文娟21-298〕には日付がない。1903. 12. 19か)。それでは一般読者が合弁の事実を知るのはむづかしい。隠そうとするから弱点とみられてそこを攻撃する出版社がでてくる。のちの中華書局である。その創設者が元商務印書館社員の陸費達だから皮肉なものだ。

中華民国が成立して商務印書館から飛び出した陸費達らが中華書局を設立した。当時、商務印書館は金港堂との合弁会社をまだ維持している。陸費達は商務印書館において出版部部長を勤めていた。内部事情に詳しいのは当然だ。教科書編集の熟練者でもある。商務印書館内では重責を担っていた人物だ。辛亥革命の到来することを予期し新しい教科書を準備していた。しかしその計画がつぶされて商務印書館を離脱する気になつたらしい。教科書の編集販売は商務印書館を経済的に基礎から支えた重要分野だ。陸費達らはその知識に精通し編集技能を保持していたから中華書局でも新しい教科書を刊行した。

異民族が支配する清朝から独立して中華民国が成立した。その清朝時代に編集刊行された商務印書館の教科書を今も使用するのか。だいいち商務印書館は日本金港堂という外国人が経営する会社と合弁をしているのだ云々。中華書局はそういう暴露広告を大々的に新聞に掲載して商務印書館を非難糾弾したのだった。

中華書局からの連続する攻撃批判圧迫を受け精神的に耐え切れず夏瑞芳は日本金港堂との合弁を破棄することにした。

夏瑞芳自身が金港堂(実質は原亮三郎個人)

との合弁を取りまとめた(ただし商務印書館と金港堂の合弁契約書は公表されたことがない)。商務印書館にしてみれば合弁後の経営業績は上昇している。大きく貢献したのは教科書の編集発行だ。金港堂から派遣された日本の長尾模太郎(号雨山)、小谷重らと商務印書館側の高鳳謙、張元済らが共同編纂した『最新国文教科書』である。爆発的な人気を博し商務印書館の経済的基盤を大きく支える重要な部門となる。また日本人印刷担当者たちとの人間関係も良かった。彼らから最新の印刷技術を導入することができた。

商務印書館の首脳は合弁を斡旋した山本条太郎(三井物産)また合弁相手の原亮三郎(金港堂)らと緊密に連絡を取り合っていた。1910年、夏瑞芳がゴム株投機(一名陳逸卿事件)で巨額損金を被った。その時には商務印書館の張元済から山本、原らに実情を報告し打開策を相談したこともある。山本は夏瑞芳を経済的窮地から救出すべく親身になって相談に乗っている^{*3}。商務印書館と金港堂の合弁そのものは経営的に見ても順調に発展拡大していた。

筆者は合弁の10年間に商務印書館と金港堂が獲得した株式利益を試算したことがある。日本側が得たのは合計521,899元だ。一方の商務印書館側は合計948,865元だった。中国人研究者はややもすれば日本側の利益だけを述べて商務印書館の所得を無視する。商務印書館は金港堂の約1.8倍の利益を得ている事実を言わないのはなぜか。もしかして被害者を装いたいのだろうか。

夏瑞芳にすれば自らがまとめた合弁を自分で取りつぶした形になる。当時の政治状況に圧迫されて泣く泣く関係を切った。

一方で商務印書館にとって金港堂はすでに用済みだったと見ることもできる。教科書編集および印刷技術などの知識、および経営についても学びつくしている。それ以上の合弁は必要ではないという判断があったように思う。それも

早い時期から理事会内部の日本人を排除する方向で動いている。

合弁は日中対等で始まった。出資金も双方10万円で同額だ。理事会の人事も商務印書館は夏瑞芳(兼社長)と印錫璋、金港堂は原亮三郎と加藤駒二と同数である。ところが資本金でいえば1906年に均衡がくずれる。商務印書館が金港堂を上まわる資本に増強した。その後も徐々に一方的な増資が続く。最終的に1913年は商務印書館側資本が821,900元に対して金港堂側は378,100元に止まっている。約2.18倍だ。理事の人事にしても1909年には日本側理事をすべて排除した。商務印書館主導の経営姿勢を露骨に示したということである。早期から合弁解除に向けて準備を固めていた。そういう基本方針だったようだ。そこに中華書局による攻撃が加えられた。商務印書館にとってはまさに渡りに船という状況という側面も否定はできない。

以上が本当のことである。鄒振環「商務印書館与金港堂——20世紀初中日的一次成功合資」(『出版史料』1992年第4期(総第30期)1992.12)に見るとおり日中合弁で成功した事例だった。

夏瑞芳は合弁解除の直後に凶弾に倒れた。

商務印書館は中華書局に反論して現在は「完全華商」であることを強調する。わざわざ合弁解約書の全文を新聞広告に掲載した(『申報』1919.7.25)ことはよく知られている事実だと思う([文娟21-417]は該広告を収録しない。小説広告ではないからか)。

「説部叢書」と「林訳小説叢書」の廉価販売広告は1915年に見える。「説部叢書」部分のみを抽出する。

[文娟21-364]『申報』1915.6.7「《説部叢書》零售四十余元,全部二十元,一百二十八冊」

[文娟21-365]『小説月報』第6巻第6号1915.6.25「《説部叢書》一百三十冊,零售

四十余元、全部二十元」
 [文娟21-366]『申報』1915.10.16「前曾選
 印初集一百種以餉同志、茲更精選情節新奇、
 趣味濃郁者一百種匯印、集中有林琴南先生
 手筆四十五種尤為特色」「“説部叢書”初
 集、“林訳小説”叢書、各収実価十元、期
 限仍以本年十二月為止」
 [文娟21-366]『申報』1915.10.24「《説部
 叢書》初集一百廿八冊、零售四十余元、全
 部二十元」

以上の広告に木箱は出てこない。提供はやめ
 てしまったのかと疑問が生じる。ところが同年
 年末の広告にふたたび姿を現わす。

5 初集本の木箱広告

初集本の広告を連続して掲載している。順番
 に示す(下線筆者)。

[文娟21-368]『申報』1915.12.16「《説部
 叢書》第一集(二)」作品とその紹介は省
 略。以下同じ。

[文娟21-368]『申報』1915.12.20「《説部
 叢書》第一集(一)^①」「全書一百種、定価
 二十元。本館所印《説部叢書》、皆系新訳
 新著之作、饒有趣味、早已風行一時、積五
 六年之力、始得完成一百種計一百三十一冊、
 茲特裝成一木箱、以便購者得窺全貌」

①此則廣告為《説部叢書》第一集系列廣
 告的第一種、故廣告標題有標“一”注明、
 第二種已經前于12月16日刊載。

ここに木箱がふたたび出現している。販売価
 格は20元に据え置いた。

文娟がほどこした注①を見る。(二)の方が
 (一)よりも以前に掲載されたという指摘は正
 しい。しかし下線をつけた「第一集系列」とは
 何か。似た表示に「第一集初集」がある(『商

務印書館図書目録(1897-1949)』北京・商務
 印書館1981)。しかし「第一集系列」という記
 述は今まで見たことがない。付建舟のいう「十
 集系列」「四集系列」と似ていてまぎらわしい。
 それらとは別の系列があるのかと勘違いしそ
 うだ。推測すると広告にある「第一集」を指して
 そのまま「第一集系列」と言っているのではな
 いか。ここにこそ正確な注釈が必要だった。

筆者は中村忠行にならって元版と初集本に区
 別する。付建舟は上述のとおり十集系列と四集
 系列だ。「第一集系列」はそれらとは異なっ
 ているから理解に苦しむ。文娟はそれが初集で
 あることを理解しているだろう。「第一集系列」
 と新しく造語する必要はまったくなかった。初
 集本あるいは四集系列だと書けばすむことであ
 る。後述する試行本の「第一集」があるがここ
 の初集本とは刊年が異なる。

くり返すが広告にある「第一集」の中身は初
 集にほかならない。商務印書館こそが「初集」
 と表示すべきだった。なぜそうしなかったのか。
 初集は全100編ある。それを10編ごとにまとめて
 広告に出した。まるで元版のように区切った
 だけだ。

「第一集」と表記した理由は推測できる。初
 集に続く2集がある。この2集を指して新聞廣
 告では「第二集」([文娟21-376]『申報』
 1916.1.23)と書いて整合性を保持したつもり
 だ。注意してほしい。「説部叢書」第二集は存
 在しない。「二集」というのが正確だ。「初集」
 に続くのだから「二集」となるのは当然である。
 それを維持していれば問題はなかった。だがそ
 のあとで「第三集」「第四集」を出したのだから
 呼称はもともと不統一なのだ。

この広告はどう見ても「初集」「二集」とい
 う実物にある表記を反映していない。版元であ
 る商務印書館自身が実態を把握せずに不適当な
 用語を使う。その程度の管理能力しかなかった
 のかと疑う。

以下に表題だけを示す。

[文娵21-369] 『申報』 1915. 12. 23 「<説部叢書>第一集 (三) 」
 [文娵21-370] 『申報』 1915. 12. 24 「<説部叢書>第一集 (四) 」
 [文娵21-371] 『申報』 1915. 12. 30 「<説部叢書>第一集 (五) 」
 [文娵21-372] 『申報』 1916. 1. 3 「<説部叢書>第一集 (六) 」
 [文娵21-373] 『申報』 1916. 1. 13 「<説部叢書>第一集 (七) 」
 [文娵21-374] 『申報』 1916. 1. 15 「<説部叢書>第一集 (八) 」
 [文娵21-374] 『申報』 1916. 1. 17 「<説部叢書>第一集 (九) 」
 [文娵21-375] 『申報』 1916. 1. 19 「<説部叢書>第一集 (十) 」
 [文娵21-376] 『申報』 1916. 1. 23 「第一集<説部叢書>九十一至一百」。文娵の説明は「内容同1916年1月19日, 但標題相異」。

以上は「説部叢書」初集だ。同じく2集の販売広告に木箱がでてくる。

[文娵21-383] 『申報』 1916. 2. 18 「商務印書館<説部叢書>二集出版」「預約期限既滿, 書已完全出版, 曾購預約諸君, 請即凭券取書。全書共一百種, 洋裝一百六十餘冊, 定價二十八元, 郵費一元二角。如欲另備木箱, 加洋一元四角」

ここは正しい「二集」を使用する。1908年の木箱は1元だった。それが別売りで1元4角に値上がりしている。上の広告によれば2集も箱売りだ。木箱は元版、初集および2集を収納するのにも使われた。

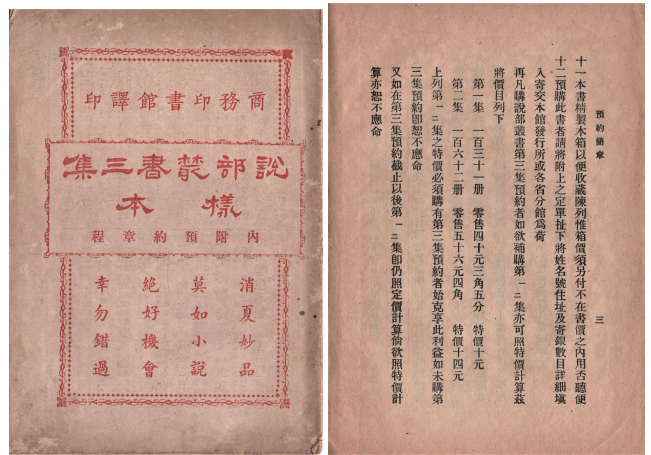
その後も初集本の箱売りは続く。

[文娵21-383] 『申報』 1916. 3. 3 「第一集<説部叢書>(一) 第一至第十止」「全書一百種, 定價二十元。本館所印<説部叢書>, 皆系新訳新著之作, 饒有趣味、早已風行一時, 積五六年之力, 始得完成一百種, 計一百三十三冊, 茲特裝成一木箱, 以便購者得窺全貌(後略)」

この広告では100種で合計133冊とある。ここでもまだ「第一集」の「第一至第十止」と現実

を反映していない記述をする。奇異だ。

『説部叢書三集様本/内付預約章程』商務印書館(刊年不記。推測1920)が手元にある。



説部叢書三集様本

その内容は商務印書館が宣伝用に作成した小冊子である。「説部叢書」第3集が完結するのでまとめて販売する。その予約募集を案内している。無料配布したから刊年不記だ。

「説部叢書三集預約簡章」の1条に「預約期限以旧曆庚申年七月底為止八月底出書」(1頁)とある。庚申は1920年を指す。1920年旧曆七月を予約期限と定めた。ゆえに該小冊子は1920年に配布されたと判断する。

木箱が出てくるのは次の部分だ。「本書精製木箱以便收藏陳列惟箱價須另付不在書價之内用否聽便」(3頁)。以前に言っていた携帯に便利という説明はさすがに消えている。收藏陳列するために作成したと表現を変えた。ただし料金は別に支払う必要がある。価格は明示されていない。要不要は自由だ、というから購入者は選択できた。

この小冊子には「第三集目録」がある。続いて既刊の「初集」「二集」に収録した作品目録を明記する。それぞれの名称は正しい。しかし別の箇所では違う記述をする。

「第一集 一百三十一冊 零售四十元三角五分 特價十元」(3頁。以前は「原定価四十元

零二角五分」と書いていた) とか「第二集」(3頁)である。「初集」「二集」にしていな
ない。小冊子の題名が『説部叢書三集様本』だ。
初集、2集、第3集を収録するから「三集」と
している。それにしても呼称不統一というのが
基本方針なのかと疑ってしまうほどに緩い。細
かいことは問題にしないのだろう。

冊数は131冊とする。初集の冊数について商
務印書館自身が異なる数字を提出しているのは
明らかだ。後でまとめて説明する。

6 もうひとつの「説部叢書」第一集——試行本

元版と初集については以上のように説明はで
きる。ただしここに不可思議な「説部叢書」第
一集がある。商務印書館が新聞広告で称する
「第一集」(=初集)とは別物だ。鄭方曉『清
末民初商務版《説部叢書》研究』(復旦大学
2013 博士論文)でその存在を知った。探して
みれば以下のものが見つかる。集編番号、書名、
刊年のみを示す。

- 第一集第一編『金銀島』1914.4再版
- 第一集第一二編『回頭看』乙巳2(1905)/1913.12再版
- 第一集第一三編『迦茵小伝』(乙巳2(1905)/1913.12再
版)
- 第一集第一七編『埃及金塔剖尸記』1913.12再版
- 第一集第二二編『鬼山狼侠传』乙巳(1905)7初版/
1914.4再版
- 第一集第二三編『曇花夢』1906.4/1914.4再版
- 第一集第二六編『斐洲煙水愁城録』乙巳10/1914.4再版
- 第一集第三四編『魯濱孫飄流続記』丙午4(1906)/1914.4
再版
- 第一集第三五編『洪罕女郎伝』1906.1/1913.12三版
- 第一集第三五編『洪罕女郎伝』丙午1(1906)/1914.4再版
- 第一集第三九編『蛮荒誌異』丙午2(1906)/1913.12三版
- 第一集第八十編『朽木舟』1913.12三版

「第一集」と称するのは元版だ。表紙は元版



孔夫子旧書網

のタンポポ文様と同じである。ただし単色である
のが元版とは異なる。そこまではいい。ところ
が「第一編」と表示する。初集の編番号に
似ている。だが初集は「第十一編」だ。意味は
同じだが表記が違う。つまり上に示したのは元
版の表紙と初集の集編番号の双方を混合したも
のだ。別の言いかたをすれば元版ではないし初
集でもない。第3形態というべき刊行物である。

また刊年を見れば1913年12月から1914年4月
に集中している(記述している初版の刊年はこ
こでは重要ではない)。そこから筆者は元版の
延長上にある試行本だろうと考えた。赤色リボ
ン文様の初集本とほぼ平行して印刷刊行された。
ただし後世に広く伝わるのは赤色リボン文様の
表紙を持つ初集本だ。商務印書館は混合種の第
一集については継続刊行しなかった。だから忘

れられた。古書店にいくつかが現われてその存在が判明する。

筆者は試行本だと幾度か言及したが反応を示す研究者はまだ出現していないようだ⁴⁾。

7 「説部叢書」初集の冊数

商務印書館の提示する改組後の元版、改称して初集の冊数が問題である。

改組後の元版および初集が全100編(種)という数字は基本にあって変わらない。ところが作品によっては1編で2冊、3冊あるいは4冊に分冊されることがある。編数と冊数が異なる原因だ。

どこまで違う冊数が示されているのか。次にまとめる。

1908年8月16日の広告では128冊と記述した。それで一貫していれば問題は表面化しなかっただろう。ところが1908年9月13日で130冊、1915年12月20日で131冊とした。1916年3月3日ではさらに増えて133冊という。1918年1月28日は123冊に減少([文娟21-403])。同年7月18日は131冊にもどる([文娟21-406])。1920年6月8日も131冊([文娟21-424]第一集とする)。1920年も131冊。また商務印書館が配布した『図書彙報』第118期(1927.4)、同第121期(1930.2)の記述はどちらも「初集一百種 一百三十冊 二十元」なのだ。

発行済みの書籍数がどうして一致しないのか。ばらばらな数字は読者に理解しにくい印象を与えている。複数の数字が出ているということは広告を出すたびに実物で確認したからだろう。数えて以前とは違う数字が出現した。怪しい。

いい機会だから樽目録第14版(2022)にもとづき付建舟『商務印書館<<説部叢書>>叙録』(北京・中国社会科学出版社2019.8)を参照して数えてみた。筆者の得た数字は全131冊である。商務印書館の『商務印書館書目提要』1909.九改定7版、また『申報』1915年12月20日の広

告および『説部叢書三集様本/内付予約章程』(1920)また文娟の収集した広告文の全131冊と一致する。商務印書館編訳所所員が「説部叢書」の実物で数回にわたって勘定したところに誠実さが窺えて評価できる。しかし全体の数字が合致しないから商務印書館編訳所の管理能力が逆に問われる結果になった。

「説部叢書」の木箱売りは1908年から始まっている。1920年まで追跡できた。蓋についていえば本稿掲載色彩写真とは別の意匠、彫り文字になっているもの(1911)がある。少なくとも2種類の存在は確認できる。 罫

【注】

- 1) 参照文献。樽本照雄「商務印書館版「説部叢書」の成立」および「商務版「説部叢書」研究の昔と今」。『商務印書館研究論集 増補版』清末小説研究会2016.5.15 電字版所収
- 2) 鄒振環『20世紀上海翻譯出版与文化變遷』南寧・広西教育出版社2000.12。51-52頁。また同著『訳林旧踪』南昌・江西教育出版社2000.9。129頁
- 3) 関連文章をいくつか示す。

汪家熔「橡皮股票風波中的夏瑞芳」『出版博物館』2009年第2期(総第6期)2009.6

柳和城「商務印書館“橡皮股票”風波豈容否認! ——与汪家熔先生商榷」『中華読書報』2009.8.15 電字版

汪家熔『中国近現代出版家列伝・張元濟』上海辞書出版社2012.10 張元濟写真帳付き。『大變動時代的建設者——張元濟伝』(成都・四川人民出版社1985.4)を増補訂正したもの。『繡像小説』の主編について「這個刊物的編輯人可能是夏曾佑」(107頁)と1980年代の主張を繰り返している。間違い。商務印書館自身が李伯元を『繡像小説』に招いたと新聞広告を出していた事実がある。

趙俊邁『典瑞流芳: 民国大出版家夏瑞芳』北京・商務印書館2017.4。附録に「商務印書館大事紀」があるも金港堂との合弁とその解消の記載がない、『繡像小説』刊行に触れない。

柳和城『書裏書外——張元濟与現代中国出版』上海
交通大学出版社2017.8

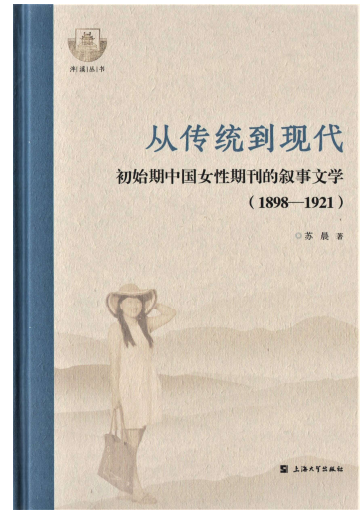
柳和城『橄欖集：商務印書館研究及其他』北京・
商務印書館2020.1

黄 嗣『中国出版家・夏瑞芳』北京・人民出版社
2021.8。附録1 商務印書館董事會議章程、附録2
“中華民國三年一月商務印書館股東非常會議”記録、
附録3 商務印書館与日本金港堂終止合辦合同など
がある。商務印書館と金港堂の合併に関して以前の
中国学界では「敏感」な問題だった。本書を読めば
その「禁区」は解禁されたように思う。

4) 神田一三「商務版『説部叢書』試行本」(『清末小
説から』第125号 2017.4.1) および「『説部叢書』
元版はタンポポ文様」(『清末小説から』第126号
2017.7.1)。樽本『清末小説三談』(清末小説研究
会2019.3.1 電字版) 所収



蘇 晨○『從傳統到現代——初期中國女性期刊的
敘事文學(1898-1921)』上海大學出版
社2022.6



戰 玉冰○『現代与正義——晚清民國偵探小説研究』
上海社會科學院出版社2022.10



清末小説から

常 方舟○論著評介 <林紆冤案事件簿> 『中国
文学年鑑』2020.12 未見

超 凱○“本土化”与“商業化”的近代莎劇——
林訳<吟辺燕語> 『蘭州交通大學學報』
2021年第1期 2021.2 未見

劉 雲虹○論翻譯批評的歷史性——以林紆“冤案事
件”為中心 『英語研究』2022年第2期
2022.10 未見

劉 松○林紆小説的“定論”与真相——<林紆冤
案事件簿> 『書屋』2022年第12期 2022.12
未見

張 美琪○劉鶚治河經歷与<老殘遊記>中的運河描
写 『明清小説研究』2023年第1期(総第
147期) 2023.1.15

王 敏玲○『西來蝴蝶 世紀之光：周瘦鵑翻譯文學
研究』南京・江蘇鳳凰文藝出版社2022.3